

# 「個別主義の帝国」ロシアの中央アジア政策

——正教化と兵役の問題を中心に——

宇山智彦

## はじめに

近年の「帝国」研究の隆盛にはさまざまな理由が考えられるが、その一つは、「国民国家の行き詰まり」が叫ばれる中で、国民国家とは異なる国家システム・国際システムへの関心が高まったことであろう<sup>(1)</sup>。そこで想定されるのは、特定の国民文化に基づく均質で閉じた空間を作ろうとする国民国家と異なり、帝国は多文化・多民族空間を普遍主義によって統合するというイメージである。普遍主義という概念は最近の「アメリカ帝国」をめぐる議論の中でも鍵となっており、たとえばエマニュエル・トッドは、帝国の本質的な強さの源泉の一つは、「普遍主義……すなわち人間と諸民族を平等主義的に扱う能力である」と断言している<sup>(2)</sup>。帝国の中には、ローマ帝国や「アメリカ帝国」のように、普遍主義的イデオロギーを強力に普及させようとする帝国と、イスラームを基軸としながらも多様性を包み込む、緩やかな統合と共存のシステムを作り上げたオスマン帝国<sup>(3)</sup>のようなケースがあるとされるが、いずれにしても何らかの一貫した統合原理が想定されている。

ロシア帝国にそのような統合原理はあったであろうか。トッドは、ロシアは過去も現在も「普遍主義的気質の国である」と素朴に言い放つが<sup>(4)</sup>、ロシア史研究者の多くはより慎重な見方を取る。ドミニク・リーヴェンは、前近代のロシア政府は地方の貴族や宗教指導者と同盟を組むことによって帝国を運営したが、近代に入ってから帝国を維持するための一貫した新しい戦略の一つとして編み出せず、新しい普遍的なイデオロギーを構築することもできなかったと指摘する<sup>(5)</sup>。筆者もこれと似た見方を取るが、単に戦略を編み出せなかったと言って終わるのではなく、ロシアの統治者たちの思考・行動パターンをより積極的に見出す必要があると考える。

その点で興味深いのは、ロシア帝国の統治対象は民族ではなく領域であったとし、領域ごとの統治戦略を抽出しようとする松里公孝の研究である<sup>(6)</sup>。しかし、国の行政単位が民

\* 編集部注：本稿の審査関連業務は山村編集委員が代行した。

- 1 歴史学研究会編集委員会「特集『帝国』への新たな視座 I 特集によせて」『歴史学研究』776号、2003年、1頁。
- 2 エマニュエル・トッド著、石崎晴己訳『帝国以後：アメリカ・システムの崩壊』藤原書店、2003年、146頁。
- 3 鈴木董「多様性と開放性の帝国：オスマン帝国」山内昌之・増田一夫・村田雄二郎編『帝国とは何か』岩波書店、1994年、155-180頁。
- 4 トッド『帝国以後』214頁。
- 5 ドミニク・リーベン著、松井秀和訳『帝国の興亡下』日本経済新聞社、2002年、131-133頁。
- 6 MATSUZATO Kimitaka, "General-gubernatorstva v Rossiiskoi imperii: ot etnicheskogo k prostranstvennomu podkhodu," in *Novaia imperskaia istoriia postsovetskogo prostranstva* (Kazan, 2004), pp. 427-458.

族分布と一致しなかったこと自体は、領域的民族自治の考え方が支配的になる以前の時代には当然のことである。領域原理と民族原理をトレードオフの関係と見るのではなく、両者の相関を検討するべきであろう。また「尊敬すべき敵」とされる民族がいる地域では「エスノパルティズム」的政策がとられたが、「尊敬すべき敵」のいなかった中央アジアなどでは総督らの関心は民族ではなく経済問題に集中した、という理解は、本稿からも分かるように実態に反する。民族政策においては、「同化」と「異化」の両面を見るべきだという西山克典の問題設定が説得力を持つが<sup>(7)</sup>、単に両面があったというにとどまらず、二面的で矛盾する政策がなぜ取られたのかを解明する必要があると思われる。

近代の帝国であるロシア帝国が、古代・中世の帝国とさまざまな点で異なる性質を持つことは言うまでもない。特に、「近代史は『帝国』をも『国民国家』たらしめようとする作用をともなった」<sup>(8)</sup>という見方は理解を得やすいであろう。しかしだからといって、ロシア帝国がその末期には着実に国民国家化しつつあったと考えれば、たちまち陥穽にはまる。ジョシュア・サンボンの『ロシア国民を徴兵する』は<sup>(9)</sup>、ロシア帝国末期およびソヴェト期初期の徴兵を題材に国民統合のプロセスを描こうとした意欲作だが、帝政崩壊に至るまで少なからぬ民族が兵役を免除され続け、エスニックなロシア人の中にも断裂が繰り返し現れた状況を、国民統合という一本の線でまとめるのはいかにも無理がある。

本稿では、「同化」と「異化」という問題軸を、古典的帝国と近代の帝国という問題軸と組み合わせるため、中央アジア（特にカザフ草原）における宗教政策、中でもロシア正教布教をめぐる政策と<sup>(10)</sup>、兵役の導入とにかかわる政策論議を取り上げる。ロシアは18世紀頃まで正教に改宗した非ロシア人エリートを積極的に登用し、ヴォルガ地域などでは一般住民への宣教も、強制を伴いながら大規模に行った。エカテリーナ2世期には啓蒙主義の影響力が正教にまさったが、アレクサンドル1世期の末以降、ツァーリおよび政府に対する正教の影響力は再び増し<sup>(11)</sup>、有名なウヴァーロフ文相の「正教、専制、ナロードノスチ」という教育政策の三本柱が示すように、正教は帝国イデオロギーの重要な一部であり続けた。従って中央アジアでも、古典的・普遍的イデオロギーによる帝国統合の方法として、正教化が有力な選択肢となった可能性が想定できる。

他方、近代的な統合の方法としては教育をはじめさまざまな施策が考えられるが、ここでは、19世紀後半から20世紀初頭という時代に、世界の多くの国が国民皆兵の徴兵制を国民国家建設の一環として整備していたことに注目したい。住民の識字率が低く、行政側も多様な文化環境に合わせた義務教育システムを構築するための人的・物的資源を持たない中央アジアでは<sup>(12)</sup>、兵役は統合・国民国家化のためのより容易な方法であり得た。これ

- 
- 7 西山克典「帝国の『東方』支配：『同化』と『異化』によせて」『ロシア史研究』第72号、2003年、34-50頁。
- 8 高田和夫「ロシア帝国史の方法をめぐって」『ロシア史研究』第65号、1999年、74頁。
- 9 Joshua A. Sanborn, *Drafting the Russian Nation: Military Conscription, Total War, and Mass Politics, 1905-1925* (DeKalb: Northern Illinois University Press, 2003).
- 10 対イスラーム政策については、正教化の問題と関係する範囲で論じる。
- 11 Edward C. Thaden, *Conservative Nationalism in Nineteenth-Century Russia* (Seattle: University of Washington Press, 1964), p. 13.
- 12 教育の問題は本稿の検討対象外とするが、代表的な教育家の一人で典型的な「オリエンタリスト」であるオストロウモフの中央アジア観について、帯谷知可「オストロウモフの見たロシア領トルキスタン」『ロシア史研究』第76号、2005年、15-27頁、参照。

らの問題を検討することは、近年の研究で注目されている<sup>(13)</sup>、「ロシア化」政策の多様なあり方の解明にも貢献するであろう。

先回りして言えば、中央アジアではロシア正教の布教も、兵役の導入も、本格的な形では行われなかった。よって、本稿ではなぜこれらの政策が実現されなかったかを検討することになる。過去に起きた物事を研究するのが歴史学だとすれば、このようなテーマは正統派的研究の対象外と見なされよう。そのためか、これらの問題に関する先行研究は極めて乏しい<sup>(14)</sup>。しかし本稿では、「実際には起きなかったこと」に焦点を当てることによって何が見えてくるかという実験を試みたい。

本稿が近年の研究動向との関係でもう一つ意識している問題は、行政当局の視点を重視するロシア帝国論と、現地民の視点を重視する地域研究とが必ずしも有機的に接合できていないという状況である。ロシア帝国論の視点に立ったダニエル・ブラウアーの『トルキスタンとロシア帝国の運命』は<sup>(15)</sup>、膨大な文書館史料を駆使した中央アジア近代史研究としては画期的な本であるにもかかわらず、書評者たちから極めて辛辣な評価を受けた<sup>(16)</sup>。批判点は多岐にわたるが、最も根本的な問題は、中央アジア現地の生活、現地民の視点、現地語の史料を無視しているという点であろう。中央アジア近現代史研究は、一時の現地語史料・現地文化重視の流れから、文書館史料の利用拡大に伴い再びロシア語史料・政策史中心になる傾向があるが、ブラウアーへの批判は、こうした傾向の行き過ぎへの警鐘と考えることができる。

本稿は、中央アジア地域研究に携わる筆者がロシア帝国論の分野に挑戦するものであり、そのために帝国論の視点とロシア語史料に意図的に接近している。しかし正教化と兵役というテーマの設定は、中央アジア現地民についての研究に由来するものである。正教を押しつけられずイスラーム信仰の権利を保障されることは、多くのムスリムにとって大きな関心事であった<sup>(17)</sup>。兵

13 Aleksei Miller, “Rusifikatsii: klassifitsirovat’ i poniat’,” *Ab Imperio* 2 (2002), pp. 133-148.

14 カザフ草原でのロシア正教会の宣教活動についてはロバート・ジェラシの研究が貴重だが、宣教の政策的背景にはほとんど触れていない。Robert P. Geraci, “Going Abroad or Going to Russia? Orthodox Missionaries in the Kazakh Steppe, 1881-1917,” in Robert P. Geraci and Michael Khodarkovsky, eds., *Of Religion and Empire: Missions, Conversion, and Tolerance in Tsarist Russia* (Ithaca: Cornell University Press, 2001), pp. 274-310. セバステイアン・ペイルーズは、行政官たちは常に教会による中央アジアでの布教の試みに無関心か敵対的だったと主張するが、論拠を示していない。Sébastien Peyrouse, “Les missions orthodoxes entre pouvoir tsariste et allogènes: Un exemple des ambiguïtés de la politique coloniale russe dans les steppes kazakhes,” *Cahiers du Monde russe* 45:1-2 (2004), pp. 109-136. 帝国内諸民族の徴兵問題については、マーク・フォン・ハーゲンが概観しているほか、第一次世界大戦中の政策論議に限れば、前述のサンボーンのものを含めある程度の研究がある。Mark von Hagen, “The Limits of Reform: The Multiethnic Imperial Army Confronts Nationalism, 1874-1917,” in David Schimmelpenninck van der Oye and Bruce W. Menning, eds., *Reforming the Tsar's Army: Military Innovation in Imperial Russia from Peter the Great to the Revolution* (Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press, 2004), pp. 34-55.

15 Daniel Brower, *Turkestan and the Fate of the Russian Empire* (London: RoutledgeCurzon, 2003).

16 参照した書評の執筆者は以下の通り。Michael Khodarkovsky [*Slavic Review* 63:3 (2004), pp. 643-645]; Jeff Sahadeo [*The Russian Review* 63:1 (2004), pp. 170-171]; Michael Rouland [*Ab Imperio* 1 (2004), pp. 556-559]; Mark Bassin [*Revolutionary Russia* 17:1 (2004), pp. 142-143]; Gulnar Kendirbai [*Central Eurasian Studies Review* 3:2 (2004), pp. 24-27].

17 カザフ人の間では、1731年にアブルハイル・ハンがロシアに臣属した際、ツァーリ（アンナ女帝）がカザフの宗教と土地には手を触れないと約束したと広く信じられていた。その例としてミル・ヤクブ・ドゥラトフの記述について、宇山智彦「20世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観：M. ドゥラトフ『めざめよ、カザフ！』を中心に」『スラヴ研究』第44号、1997年、19頁、参照。

役の問題も、後で見るようにカザフ知識人の間でよく議論され、帝政末期の中央アジアにおける最大の事件である 1916 年反乱に直結した。また、ロシア式の教育が十分に普及しなかった理由の一つは、ロシア式の学校に行くと正教に改宗させられ兵役に取られると一部の親が信じていたことにあり<sup>(18)</sup>、2つの問題はしばしばセットで考えられていたのである。従ってこれらのテーマは、ロシア側の政策と現地民側の見方・反応の交錯を考えるうえで好適と言える。

## 1. 中央アジア（特にカザフ草原）におけるロシア正教化政策

### 1-1. 初期の布教とステップ委員会調査

ロシア領中央アジアでのロシア正教の組織的布教が最初に提起されたのは、知られている限り、1828 年にトボリスク主教がカザフ草原に宣教団を開設することを提案した時である。この提案は、西シベリア総督イヴァン・ヴェリヤミノフによって「時期尚早」として却下された<sup>(19)</sup>。しかし遅くとも 19 世紀半ばに、布教活動がカザフ草原である程度行われていたことは確かである。後述のステップ委員会の資料によれば、オレンブルグ・キルギズ<sup>(20)</sup>州（カザフ草原西部）では 1855-64 年に 127 人のカザフ人が、またシベリア・キルギズ州（カザフ草原北部・中部）では 1860-64 年に 109 人のカザフ人がロシア正教に改宗したという。セミパラチンスク州（カザフ草原東部）にもシベリア・キルギズ州に劣らない数の改宗者がいただろうと同委員会は推測している<sup>(21)</sup>。

1863 年にはエカテリヌブルグ市民のステファン・プシェニシニコフなる人物が、ノヴゴロド・ペテルブルグ府主教イシドルに、ペトロパヴロフスクに宣教団を置くことを提案した。彼の論拠は、カザフ人はイスラームの規則を知らずキリスト教に関心を持っているという認識と、「皇帝と同じ宗教を信じている民族でなければ、皇帝を真に愛し献身的であることはできない」という考えであった。これについて各地の役所からは賛成意見も出るが、カザフ人、特に豊かで影響力のある者たちはイスラームを堅く信じているために宣教は不可能だという、アトバサル管区庁などの意見もあった。結局、トボリスク主教座管理局 konsistoriia も西シベリア総督アレクサンドル・デュガメリも、提案を却下した<sup>(22)</sup>。

18 UYAMA Tomohiko, "A Strategic Alliance between Kazakh Intellectuals and Russian Administrators: Imagined Communities in *Dala Walayatining Gazeti* (1888-1902)," in HAYASHI Tadayuki, ed., *The Construction and Deconstruction of National Histories in Slavic Eurasia* (Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University, 2003), p. 251; 帯谷「オストロウーモフの見た」22頁。

19 Peyrouse, "Les missions orthodoxes," p. 114.

20 ロシア語では 18 世紀から 1925 年まで、カザフ人を誤って「キルギズ kirgiz」と呼んでいた。クルグズ人も「キルギズ」ないし「カラ・キルギズ」などと呼ばれた。カザフ語・クルグズ語での自称は一貫して「カザク qazaq」「クルグズ kirgiz」である。本稿では原則として地の文では「カザフ」「クルグズ」と表記し、ロシア語を原文とする引用文や行政区画名・機関名の中では「キルギズ」と表記する。

21 Rossiiskii gosudarstvennyi voenno-istoricheskii arkhiv (RGVIA), f. 400 [Glavnyi shtab], op. 1, d. 120, l. 71ob.

22 Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Kazakhstan (TsGA RK), f. 369 [Akmolinskoe oblastnoe pravlenie], op. 1, d. 1932g, l. 1-6ob.; RGVIA, f. 400, op. 1, d. 120, l. 70ob.; V.Iu. Sofronov and E.L. Savkina, "Deiatel'nost' protivomusul'manskoi missii v Tobol'skoi eparkhii." [http://www.zaimka.ru/08\_2002/sofronov\_mission/ 以下、URL は特記以外 2006 年 1 月 10 日現在有効]

しかし程なくして、政府は正教化について積極的な見方を示した。カザフ草原の統治制度改革の立案のためステップ委員会（1865-68。最終的には新しい征服地トルキスタンの統治制度の考案にも携わった）が設置された際、宗教問題の検討が課題の一つとされたのである。具体的には、カザフ人はいまだにシャマニズムの徒であって、タタール人・バシキール人を通してたらされたイスラームにはあまり好感を持っていないという見方があるが、どのようにしてこれ以上イスラームが強くなるのを止めることができるか、どのような条件があればキリスト教を広めることができるかを明らかにせよというのであった<sup>(23)</sup>。

ステップ委員会が行った現地調査の結果は、カザフ草原に予想以上にイスラームが浸透していたことを示している。西シベリア総督府管内では公式のものだけで32のモスクがあり、オレンブルグ総督府管内では公式のモスクは認められていなかったが、非公式のモスクは相当あると見られた。ムッラーはタタール人とは限らず、カザフ人のムッラーも少なからずおり、特に「コジャ」が多かった<sup>(24)</sup>。

しかし委員会は、エカテリーナ2世以来のイスラーム優遇政策を批判し、ロシア内地諸県のムスリムとアジア中央部のムスリムの間に位置するカザフ人が、両者を結びつけるのか永久に切り離すのかは重要な問題だとして、カザフ人へのイスラームの影響力を弱めることに積極的な態度を取った。その際、イスラームに批判的なカザフ知識人チョカン・ワリハノフの覚書、「ステップにおけるイスラームについて<sup>(25)</sup>」に言及していることも注目される。宣教についても、前述のように少数ながら正教への改宗者がいることに注目して楽観的な結論を出した。従来はカザフ人の反乱が相次ぎ、正教の布教には慎重にならざるを得なかったが、平穏になった今、布教に取りかかるべきだというのである。ただし、カザフ人に初めから目的を悟られないよう、布教には聖職者だけでなく民間人も携わらせ、行商人や教師、医者などとしてアウル（牧村）に入らせるべきだとし、聖書・宗教書はカザフ語かタタール語に訳したものを使うことを勧めた<sup>(26)</sup>。

イスラームとタタール人の影響力を弱める政策はすぐに具体化した。ステップ委員会が作成し、1868年に認可、翌年初に施行された「ウラリスク・トルガイ・アクモリンスク・セミパラチンスク州臨時統治規程<sup>(27)</sup>」により、カザフ人はタタール人を中心とするオレンブルグ・ムスリム宗務協議会の管轄から外されたのである（カザフ草原在住のタタール人は管轄下に残る）<sup>(28)</sup>。

23 RGVIA, f. 1450 [Shtab Omskogo voennogo okruga], op. 2, d. 12, l. 11ob.-12ob.

24 RGVIA, f. 1450, op. 2, d. 12, l. 106-107, 243-244, 306-310ob., 327, 370-371ob., 395-396, 415, 448. カザフ草原におけるコジャ（ホジャ）とは、預言者ムハンマドないし正統4カリフの子孫とされる人々で、カザフ人の一部と見なされる場合と別個の集団と考えられる場合があるが、いずれにしてもタタール人などとは違い古くからカザフ社会の一部を構成する人々である。

25 Chokan Valikhanov, "O musulmanstve v stepi," in Valikhanov, *Sobranie sochinenii v piati tomakh*, t. 4 (Alma-Ata, 1985).

26 RGVIA, f. 400, op. 1, d. 120, l. 67-73ob.

27 M.G. Masevich, ed., *Materialy po istorii politicheskogo stroia Kazakhstana* (Alma-Ata, 1960), pp. 323-340.

28 宗務協議会は、1789年に設立された当初はロシアの対カザフ政策と密接な関連を持っていた。特に初代ムフティーのムハメドジャン・フセインフは「キルギズ・カイサクのムフティー」とも名乗り、カザフの小ジュズに対し大きな影響力を持っていた（ただし後に小ジュズのハン家との関係は悪化した）。D.D. Azamatov, *Orenburgskoe magometanskoe dukhovnoe sobranie v kontse XVIII-XIX vv.* (Ufa, 1999), pp. 29-30, 46-48.

住民の選挙と同協議会の試験を経て県・州庁が承認する法定ムッラー ukaznoi mulla の制度も廃止された。ムッラーはロシア国籍のカザフ人から 1 郷ないし複数の郷に 1 人のみを選び、州知事が承認・罷免することになった。ワクフ（財産寄進制度）は禁止された。なお、トルキスタンも同様に宗務協議会の管轄の外に置かれたが、ワクフの存続は許された。

正教化についてのステップ委員会の提案が、具体的な施策に直接結びついたかどうかは不明である。しかし、政府と教会がヴォルガ地域で受洗タタール人の大規模な棄教・再イスラーム化と闘っていたという時代背景もあり、しばらくの間カザフ草原での布教をめぐる動きが活発化したのは確かである。1866 年にサンクト・ペテルブルグ宣教協会が、また 70 年には宗務院（シノード）が「キルギズ宣教団」の設置を提案した。しかしその時に設置先とされた地域を管轄するトボリスク主教座管理局は、ムスリムへの布教、特に広大な空間に散居するカザフ人への布教は困難とする立場を取った<sup>(29)</sup>。

布教が具体的に進展したのはセミレチエで、しかも主な対象は中国の新疆からの移民であった。彼ら（カルムイク [オイラト]、ダウール、ソロン、シボ、満洲族、漢族）は中国西北部のムスリム反乱の際、清朝支配の手先として叛徒に襲われるのを避けて、1865-67 年頃にロシア領に移住した。彼らはチベット仏教やシャマニズムなどを信じていたが、68 年のトムスク主教の訪問を皮切りに多くが正教に改宗し（72 年までの改宗者 721 人）、コサック身分に編入された。教育家ニコライ・オストロウモフは、改宗の背景として正教聖職者の努力のほかに、改宗を断るとロシア側から約束されていた援助金を取り消されるのではないかと移民側が危惧していたことや、仏画に慣れた仏教徒はムスリムと違ってイコンに親しみやすいという事情を挙げている。彼らの居住地の中心であるジュンガル・アラタウ山脈北麓のカパル郡サルカン（サルカンド）には、トルキスタン地方唯一の宣教師が置かれた。特にカルムイク人らから「ロシアのラマ」として親しまれた第 2 代宣教師のヴァシーリー・ポクロフスキーは、移民の啓蒙・生活援助と布教の拡大に取り組んだほか、9 人のカザフ人をも改宗させた<sup>(30)</sup>。

カルムイク人移民の改宗者たちはセミレチエの州都ヴェールヌイ（現アルマトゥ）周辺にもいた。彼らの援助と宣教の拡大を目的として、自身敬虔なロシア正教徒だった州軍務知事ゲラシム・コルパコフスキーの主導により、1869 年にセミレチエ正教兄弟団が設立された。だが、コサック軍に名目的に編入されたとはいえ遊牧を続け、ロシア語を解さないカルムイク人たちと、宣教を専業としない聖職者たちとの連絡は途絶えがちであり、カルムイク人の正教に関する知識は表面的だった<sup>(31)</sup>。多民族から成る新疆移民とロシア内地からの移民やコサックが入り混じるサルカンでも共通語はカザフ語であったというから、新疆移民が文化的にロシア化したとは言いにくいだろう。70 年代後半には正教兄弟団は

29 Sofronov and Savkina, “Deiatel’nost’ protivomusul’manskoi missii.”

30 N.P. Ostroumov, “Kitaiskie emigranty v Semirechenskoi oblasti Turkestanского kraia i rasprostranenie sredi nikh pravoslavnogo khristianstva,” *Pravoslavnyi sobesednik*, March 1879, pp. 270-271; July 1879, pp. 224-230, 245-259; August 1879, pp. 364-365; V. Koroleva, “Zhizneopisanie Arkhiepiskopa Sofonii (Sokol’skogo),” *Prostor* 12 (2003) [<http://prostor.samal.kz/texts/num1203/kor1203.htm> 2005 年 5 月 29 日閲覧].

31 TsGA RK, f. 234 [Sovet Semirechenskogo pravoslavnogo bratstva], op. 1, d. 1, l. 18-19, 69-69ob., 83ob., 85; d. 5, l. 1-12. セミレチエ正教兄弟団の規約は Ostroumov, “Kitaiskie emigranty,” August 1879, pp. 369-375 に掲載されている。

紙の上の存在となり<sup>(32)</sup>、85年頃に移民のほとんどは新疆に戻った。移民の何人かは帰還の理由を、ロシア人農民の債務奴隷にされ、コサックも敵対的であったからと説明している<sup>(33)</sup>。コルパコフスキーらの援助の試みにもかかわらず、正教への改宗は彼らの福利を保証しなかったのである。

## 1-2. イリミンスキー、カウフマン、コルパコフスキー

布教の活発化の流れの中で中央アジアへの正教教育導入に乗り出してきたのが、著名な教育家で宣教師のニコライ・イリミンスキーである。しばしば誤解されることだが、彼の通常の活動はムスリムに対する正面からの布教ではなく、既に正教化した非ロシア人の棄教を防ぎ、またヴォルガ・ウラルの諸民族やカザフ人に対するタタール人の影響をそぐことを目的としており、ムスリムに対する公然たる正教教育を唱えたのは彼の経歴の中でも例外的であった。彼に希望を与えたのは、前述のカルムイク人らの改宗と、アルタイのチョールヌイ・アヌイに、カザフ草原から移住して正教に改宗した100家族ほどのカザフ人がいるという事実だった。彼は、1869年にトルキスタン総督コンスタンチン・フォン・カウフマンに対して、この2例を拠り所として慎重にカザフ人に正教教育を広めるためキリスト教異族人<sup>(34)</sup>学校を設立することを提案し、さらにトルキスタン全体における教育の責任者として神学アカデミーでの自分の教え子を推薦した<sup>(35)</sup>。

しかし、「正教徒もムスリムも同じようにロシアの有益な市民となれるような」、宗教の違いにこだわらない教育を求めるカウフマンによって、イリミンスキーの提案はあえなく却下された<sup>(36)</sup>。よく知られているようにカウフマンは、中央アジアのイスラームはハンやアミールの政権によって支えられてきたものであって、公的な支援をしなければ自然に衰えると考え、イスラームに対する制度的な保障や支援はしないが干渉もしないという「放置政策」を取った。そして信仰心の強い（当時の言葉では「狂信的」な）ムスリムを刺激しないよう、正教の宣教は行わないという方針を持っていたのである<sup>(37)</sup>。

ただし、「狂信的」ではないと考えられたカザフ人に対する布教には、カウフマンも必ずしも反対していたわけではないようである。彼は1870年に、前述のステップ委員会の布教提案を宗務院が支持しているという内容の文書を、「参考と指針のために *dlia svedeniia i*

32 Ostroumov, “Kitaiskie emigranty,” August 1879, pp. 361-362, 378.

33 V. G. Datsyshen, *Ocherki istorii Rossiisko-Kitaiskoi granitsy vo vtoroi polovine XIX - nachale XX vekov* (Kyzyl, 2001), pp. 49-50, 156-160.

34 「異族人 *inorodtsy*」は、ロシア帝国周縁部に住む主にアジア系の諸民族を指した呼称。宇山智彦「異族人」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年、58-59頁、参照。

35 P.V. Znamenskii, *Uchastie N.I. Il'minskogo v dele inorodcheskogo obrazovaniia v Turkestarskom krae* (Kazan, 1900), pp. 13-20.

36 Znamenskii, *Uchastie N. I. Il'minskogo*, pp. 20-21; 奥村庸一「19世紀ロシアの帝國的編制と東方『異族人』教育：N.I. イリミンスキーの活動から見えてくるもの」『ロシア史研究』第76号、2005年、11頁。

37 Adeeb Khalid, *The Politics of Muslim Cultural Reform: Jadidism in Central Asia* (Berkeley: University of California Press, 1998), pp. 53-56; Daniel R. Brower, “Islam and Ethnicity: Russian Colonial Policy in Turkestan,” in Daniel R. Brower and Edward J. Lazzerini, eds., *Russia's Orient: Imperial Borderlands and Peoples, 1700-1917* (Bloomington: Indiana University Press, 1997), pp. 115-135.

rukovodstva」シルダリア州軍務知事に送っている<sup>(38)</sup>。前述のセミレチエ州での新疆移民とカザフ人に対する布教も、カウフマンの管轄下で行われたものであり、彼がこれを制止しようとした形跡はない。タシケント・トルキスタン主教座がヴェールヌイに置かれたのは、タシケントに主教座を開くことをカウフマンが許可しなかったからだが<sup>(39)</sup>、ムスリム定住民の多いタシケントでは駄目でカザフ人に囲まれたヴェールヌイならよいという判断も、彼が両者を区別して政策を考えていたことを示している。従来の研究ではカウフマンの宗教政策は、熱心なムスリムであるオアシス定住民に対する政策として論じられてきたが、トルキスタン総督府が設置当初、大半が遊牧民地域であるシルダリア州とセミレチエ州から成っていたことを考えれば、遊牧民（カザフ人・クルグズ人）に対する政策と組み合わせて再検討する必要があるだろう。

セミレチエ州知事のコルパコフスキーは、カウフマンの不在時と晩年にはトルキスタン総督代行を兼ねていたが、1881年には彼の積極的な支持のもと、タシケント・トルキスタン主教の提案によって、クルグズ人地域であるイッシク（ウスク）湖のほとりに宣教修道院が設立された<sup>(40)</sup>。翌82年に初代ステップ総督（アクモリンスク州、セミパラチンスク州、セミレチエ州を管轄）に任命されてからも、コルパコフスキーは正教の布教を支持し続けた。87-88年分の皇帝宛て報告書で彼は、部族的社会構造が法の認可を失い、古い道徳的基盤が揺るがされ、新しいものはまだ作られていない状態で、カザフ人はそれまで無関心だった宗教に支えを求め、タタールやブハラの商人がこれを利用してイスラームを広めていると述べ、この宗教的関心を利用して正教会も公然と布教に取りかかるべきだと提案した。アジアにおけるロシアの領土と帝国全体との同化のためには、まず精神的（宗教的）親和性を達成すべきだというのが彼の考えであった。手順としては、貧しいカザフ人を正教徒にして村を作らせ、次第に増やしていくのがよいと述べている<sup>(41)</sup>。

彼は、正教化政策がカザフ人を抑圧するとは考えなかったようである。皇帝宛て報告書で自らしばしば強調しているように、彼は他地域からの移民を制限してカザフ人・クルグズ人・コサックの利益を守るためさまざまな施策を取った、いわば「愛民政策」の体現者であり、正教化は、カザフ文化の「純粋性」をタタール文化の「悪影響」から守るという自分の方針と矛盾しないと考えていたのだろう<sup>(42)</sup>。もっとも、彼のイニシアティブでカザフ人向けに創刊された『ステップ地方新聞』では、筆者の見た限り正教化を話題にした記事はなく、正教化が機微に触れる問題であることは十分意識していたと思われる。

38 Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistan (TsGA RUz), f. 17 [Syr-Dar'inskoe oblastnoe pravlenie], op. 1, d. 2934, l. 13-13ob.

39 主教座の聖職者たちはタシケントへの移転を求め続け、1916年末になって実現した。“Kratkii ocherk po istorii Tashkentskoi i Sredneaziatskoi eparkhii.” [http://www.pravoslavie.uz/histor01.htm]

40 Rossiiskii gosudarstvennyi istoricheskii arkhiv (RGIA), f. 796 [Kantseliariia Sviatishego Sinoda], op. 162, d. 1103, l. 5-30ob.

41 “Vsepoddanneishii otchet Stepnogo General-Gubernatora za 1887 i 1888 gody,” pp. 43-45 (RGVIA, f. 400, op. 1, d. 1292, l. 23-24).

42 『ステップ地方新聞』を通して見た彼のバターナリストティックな姿勢については、Uyama, “A Strategic Alliance” 参照。



### 1-3. 支持者を失う正教化政策

コルパコフスキーの部下である地方官吏たちは、ロシア正教の布教に必ずしも協力的ではなかったようである。彼は1885年に郡レベルの官吏たちに対して、布教を阻害せず聖職者を援助するよう求める指令を出すことを余儀なくされた<sup>(43)</sup>。結局、彼が89年に離任するまでに、ステップ総督府管内での正教化は目立った進展を見せなかった。

第2代総督マクシム・タウベは、多くの点でコルパコフスキーの政策を引き継いだ、正教化には消極的だった。一つの象徴的なエピソードがある。1889年にトボリ斯克・シベリア主教のアヴラーミーが、アクモリンスク州を訪れた際にカザフ人たちと話をし、彼らがキリスト教についてさらに話を聞きたがっているという心証を得て、コクシェタウの南東に位置するシシューチンスカヤに宣教師駐在所を開くことを提案した。タウベはこれに対し、開設に賛成だとしながらも、宣教師は完全にカザフ語を操り、ペルシア語とアラビア語を知り、コーランとそのあらゆる解釈およびイスラームの祈禱書を十分に研究し、ある程度の医学的知識を持ち、食べ物や服装、生活様式において普通のカザフ人と変わらない人物でなければならないと述べた。そして、宣教師はムッラーのように、医者か行商人に身をやつしてアウルからアウルへ渡り歩き、利益を取らない価格で薬を売って信頼を得てから福音書の教えを説くべきであるとした。東洋諸語やイスラームの研究はカザン神学アカデミー周辺の宣教師たちが実際に志していたことであり、特に受洗タタール人出身の宣教師にとってカザフ語の習得は難しくなかったはずだが、ここまで厳しい条件を満たす宣教師はまずいかなかっただろうから、冒頭の「開設に賛成」という言葉は、婉曲に断るための前置きだったと思われる。

タウベはさらに踏み込んで、公然と布教を行うと望ましくない結果をもたらす、その例はまさにアヴラーミーの訪問だったと指摘する。訪問後カザフ人の間で、それも恐らくはビー（慣習法裁判官）特別大会という有力者の集まりが関与しながら、強制的なキリスト教化を防ぎ自らの信仰を守るべく、カザフ人のためのムフティーの任命を請願するためペテルブルグに代表を送ろうとする動きが現れたのである<sup>(44)</sup>。タウベは、カザフ人は「宗教信仰の問題では極めて疑い深い民族」であり、宣教活動の発展のためには最大限の慎重さが必要だ、と結論づけた<sup>(45)</sup>。

しかしアヴラーミーは宣教師駐在所開設の許しを待たず、シシューチンスカヤの聖職者に宣教師を兼ねるよう命令した。聖職者は郡長に対し、自分の仕事はカザフ人に危険をもたらすものではなくどちらかといえば民族学研究に近いものであることを郷長・アウル長らに説明してほしい、また駅馬券を無料で提供してほしいと求めるが、郡長はアヴラーミー訪問後の混乱を引き合いに出して断った。アクモリンスク州軍務知事も、宣教師駐在所開設が認められていない以上聖職者に援助することはできないという見解を示した<sup>(46)</sup>。

43 TsGA RK, f. 64 [Kantseliariia Stepnogo general-gubernatora], op. 1, d. 5300, l. 1-4.

44 TsGA RK, f. 64, op. 1, d. 464, l. 4-6ob. ロシア帝国におけるムフティーとは、宗務協議会等の長を務めるイスラーム法学者のこと。カザフ人からは十月革命期に至るまでしばしば、オレンブルグ・ムスリム宗務協議会の管轄下に戻してほしい、ないしカザフ人のために独自のムフティー庁（宗務協議会）を作ってほしいという要求が現れた。たとえば以下を参照。D.Iu. Arapov, ed., *Islam v Rossiiskoi imperii (zakonodatel'nye akty, opisaniia, statistika)* (Moscow, 2001), pp. 302-306, 312.

45 TsGA RK, f. 64, op. 1, d. 436, l. 27-32.

46 TsGA RK, f. 369, op. 1, d. 2192, l. 2-6ob.

表 1897 年国勢調査で中央アジア諸語を母語と答えた正教徒の数

	カザフ	クルグズ	トルクメン	「サルト」	「ウズベク」	その他	計
ウラリスク州	65	-	-	-	-	-	65
トルガイ州	44	-	-	-	-	-	44
アクモリンスク州	161	-	-	-	-	-	161
セミパラチンスク州	286	-	-	0	-	-	286
セミレチエ州	105	-	-	3	-	「タランチ」 3	111
シルダリア州	31	-	-	8	2	「テュルク」 13 カラカルバク 1	55
フェルガナ州	-	3	-	104	3	「テュルク・タタール」 3 タジク 2	115
サマルカンド州	1	-	-	12	20	タジク 6	39
ザカスピ州	6	-	34	0	0	-	40
中央アジア諸州小計	699	3	34	127	25	28	916
アストラハン県	17	-	4	-	-	-	21
オレンブルグ県	80	-	-	-	-	-	80
トボリスク県	37	-	-	-	-	-	37
トムスク県	1069	3	3	0	1	-	1076
隣接諸県小計	1203	3	7	-	1	-	1214
計	1902	6	41	127	26	28	2130

注) N.A. Troinitiskii, ed., *Pervaja vseobshchaja perepis' naseleii Rossiiskoi imperii, 1897*, vols. 1-89 (St. Petersburg, 1899-1905) の該当各巻 (2、28、78、79、81-88) の第 14 表から筆者が計算・再構成。原資料では、当該県・州の中で話者の少ない中央アジア諸語を、「トルコ・タタール turetsko-tatarskie 諸語」という大きな括りのまま細分化せずに示している場合があるので、ごく少数のもれがある可能性がある。「」で括ったのは現在の言語・民族名にはない、または現在とは異なる用法の名称で、「サルト」「ウズベク」(および恐らく「テュルク tiurkskii」「テュルク・タタール tiurko-tatarskie」) は現在のウズベク語・ウズベク人、「タランチ」は現在のウイグル語・ウイグル人の一部にあたる。カザフは原資料では kirgizskii (アクモリンスク州、セミパラチンスク州、セミレチエ州、サマルカンド州では kirgiz-kaisatskii、トムスク県では kirgizsko-kaisatskii)、クルグズは kara-kirgizskii。ただしクルグズ人が多いはずのセミレチエ州にはクルグズの項目がなく、カザフに含まれている。カザフ語を母語とするとされるプルジェヴァリスク郡の 17 人、ピシペク郡の 13 人の正教徒は、恐らくクルグズ人だろう。またシルダリア州では kirgiz-kaisatskii i kara-kirgizskii として一括されているが、概ねカザフ人を指すと見なした。

宣教活動を困難にしていた理由の一つには、カザフ草原が、トボリスク、トムスク、タシケント・トルキスタン、オレンブルグ、アストラハンという 5 つの主教区に分けて管轄されていたという事情があった。コルパコフスキーは早くから、カザフ人への布教活動強化のため、トボリスク主教区内にオムスク副主教座を置くことを提案していた<sup>(47)</sup>。1895 年になってオムスクに独立の主教座が設置され、トムスク主教座の管轄下にあったキルギズ宣教団 (82 年にアルタイ宣教団から分離して成立)、およびトムスクとトボリスクの主教座が管轄していた 9 つの宣教師駐在所がここに移管された<sup>(48)</sup>。しかし現地の行政当局

47 “Vsepoddanneishii otchet Stepnogo General-Gubernatora za1883 god,” pp. 36-38 (TsGA RK, f. 64, op. 1, d. 125, l. 18ob.-19ob.).

48 Geraci, “Going Abroad or Going to Russia?” pp. 285-286; D.V. Katsiuba, *Altaiskaia dukhovnaia missiia: voprosy istorii, prosveshcheniia, kul'tury i blagovoritel'nosti* (Kemerovo, 1998), p. 34. なおカザフ人正教徒が最も多かったのはアルタイなので、カザフ人と正教の関係を考えるにはアルタイ宣教団 (1828 年創設。主な活動対象は現在アルタイ人と呼ばれている諸民族集団) についてよく検討する必要があるが、帝国の中央アジア政策とは直接関係がないため本稿の分析対象にはしていない。

が宣教師団・宣教師駐在所に積極的に協力した形跡はない。タウベは皇帝宛て報告書の中で、対カザフ人布教の役割には一切触れずにオムスク主教座の開設を報告している<sup>(49)</sup>。

ここで、中央アジア諸民族の正教化の「中間成果」を見てみよう。筆者の知る限り、改宗者数の正確かつ包括的な統計はないが、1897年の国勢調査が近似的な答えを与えてくれる。表に挙げたのは、中央アジアおよび隣接地域の諸県・州で、中央アジア諸語を母語とする正教徒の数である。トムスク県（アルタイ）のカザフ人を除いて、改宗者は非常に少ないことが分かる。トムスク県のカザフ語話者総人口は2万4643人で、各41万～95万人のカザフ語話者がいるシルダリア州以北の中央アジア各州や、25万人がいるアストラハン県に比べ少ないから、比率で言えばトムスク県カザフ人の正教化はますます突出していることになる。なお、布教対象とすることが禁じられていたはずのトルキスタンの定住民（「サルト」、「ウズベク」、タジク）やトルクメン人に若干の正教徒がいることも興味深い。彼らの改宗の事情は不明である。

#### 1-4. 正教化政策の終焉

カザフ人正教化政策の出発点が、タタール人およびオレンブルグ・ムスリム宗務協議会の活動に対する警戒心にあったことはステップ委員会の提案を通して見た通りだが、その後この警戒心が解けたわけでは決してない。1877年、内務大臣はツァーリの承認を得て、公式文書からタタール語を排除しカザフ語に代えること、郷書記（通訳）もタタール人からカザフ人に代えることを命令する。もっともこれは誤った現状認識に基づいており、実際には当時郷書記のほとんどはロシア人であった<sup>(50)</sup>。1899年には、陸軍大臣がトルキスタン総督セルゲイ・ドゥホフスコイの報告「トルキスタンのイスラーム<sup>(51)</sup>」に触発され、ステップ総督府管轄地域に対するオレンブルグ・ムフティーの影響を可能な限り制限するよう求めた。ムフティーはカザフ人の間で一定の権威を持っていたようであり、ペトロパヴロフスク郡長によれば、1900年にムフティーが同郡を訪問した際、彼に会うためにステップ諸地域から多くのカザフ人有力者が集まったという。そのほかにもタタール人のカザフ人に対する宗教・教育面での影響力についての報告が郡長たちから集まり、当地のタタール人を宗務協議会の管轄から外すという、以前からの懸案も改めて検討された<sup>(52)</sup>。

しかしながら、ステップ諸州の行政官たちがイスラームとタタール人への対抗の手段として正教化を進めようとした形跡は、19世紀末にはもはやない。トルキスタン総督府も、正教の宣伝を抑制しつづけた。ドゥホフスコイは1900年に、トルキスタン・タシケント主教が、今はトルキスタンでの宣教に適した時期だと述べたのを激しく批判した。宣教は、ツァーリが宗教に関係なく臣民に対し「父親のような心遣い」をもって接していることを現地民に分からせようとしている自分の努力に反するというのである。彼は、中国でキリ

49 “Vsepoddanneishii otchet Stepnogo General-Gubernatora za 1885 god” (TsGA RK, f. 64, op. 1, d. 125, l. 274).

50 TsGA RK f. 369, op. 1, d. 2040a.

51 小松久男『『トルキスタンにおけるイスラーム』：総督ドゥホフスキー大将のニコライ二世宛上奏文』『東海大学紀要文学部』第50輯、1988年、35-65頁。

52 TsGA RK f. 369, op. 1, d. 3696, l. 1-108ob.; Arapov, ed., *Islam v Rossiiskoi imperii*, pp. 292-293, 304.

スト教に対する反発から義和団事件が起きたことを引き合いに出し、またスーフイズムとパン・イスラーム主義の脅威を強調して、宣教の無謀さを説いた。まわりを正教徒に囲まれたヴォルガ・タタール人に対してさえ無力な宣教師たちが、世界的なイスラームの中心地の一つであるトルキスタンで成功できるはずがないというのが彼の判断であった。もっともセミレチエ州（1899年にトルキスタン総督府に再移管）での宣教は可と述べているのは、カウフマンの時と同じである<sup>(53)</sup>。

19世紀末、オムスク主教座のキルギズ宣教団は年に50～60人程度のカザフ人を改宗させていたという<sup>(54)</sup>。前掲の表の数字（アクモリンスク州、セミパラチンスク州のカザフ語話者正教徒）から考えるとやや水増しされている印象もあるが、これが正しいとしても、ステップ委員会の調査が示した1860年前後の改宗者数と比べてさほどペースは上がっていないと言えよう。しかも改宗者の多くは家畜を失ってやむを得ず定住化した貧民（ジャタクと呼ばれる）であり、カザフ社会の中でマージナルな存在であった。

1905年、革命の波の中で4月17日に宗教寛容令が出され、それまで禁止されていた正教から他宗教への改宗が条件付きで許されたことは、正教化に最終的な打撃を与えた。アクモリンスク州では、カザフ人からも、16世紀に受洗したタタール人の子孫やチュヴァシ人、さらにロシア人からも、正教からイスラームへの改宗申請が相次いで出された（すべてが許可を得たわけではない<sup>(55)</sup>）。サンクト・ペテルブルグのムスリム紙に寄せられた記事によれば、セミパラチンスクのほとんどすべてのカザフ人正教徒がイスラームに戻り、1905年以降正教に改宗した者はゼロだったという<sup>(56)</sup>。

それでも正教会は宣教活動の拡大を試み、1912年にタシケントに反イスラーム宣教団を開いたが（開設が許可された事情は不明）、成果はほとんど挙がらなかった<sup>(57)</sup>。10年にカザンで開かれた宣教師大会で一部の参加者は、行政府の援助に頼らずにカザフ草原での宣教活動を再活性化させる方法を話し合ったが、突破口は見つからなかった。障害は、政府の政策だけでなく一般のロシア人の態度にもあった。ある宣教師は、受洗カザフ人の棄教の原因は、隣人のロシア人たちが彼らに示した敵意にあると述べた<sup>(58)</sup>。

コルパコフスキーの置き土産であるイシク湖宣教修道院は、結局クルグズ人に対する宣教活動をほとんど行うことができなかった<sup>(59)</sup>。1916年反乱の際、クルグズ人の叛徒たちはイシク湖修道院を襲い、7人の修道士を殺した<sup>(60)</sup>。クルグズ人とドゥンガン人（回

53 RGVIA, f. 400, op. 1, d. 2689, l. 1-5.

54 Geraci, "Going Abroad or Going to Russia?" p. 291.

55 TsGA RK, f. 369, op. 1, d. 3885. この時、正教棄教は帝国内で広範囲に見られた。宗務院が集めた情報によれば、1905年4月17日から1907年12月までに、ヴォルガ、ウラル、西シベリアの14県で3万6299人が正教からイスラームに改宗した。帝国西部でのカトリックへの改宗はさらに大規模であった。M.A. Volkhonskii, "Natsional'nyi vopros vo vnutrennei politike pravitel'stva v gody Pervoi russkoi revoliutsii," *Otechestvennaia istoriia* 5 (2005), p. 52.

56 *V mire musul'manstva* 16 (5[18] August 1911).

57 Peyrouse, "Les missions orthodoxes," p. 134.

58 Frank T. McCarthy, "The Kazan' Missionary Congress," *Cahiers du Monde russe et soviétique* 14:3 (1973), pp. 321-322, 327-329.

59 "Zhitie prepodobnomuchenikov Serafima i Feognosta." [<http://www.orthodox.kz/article.php?razd=27&publid=45>]

60 Ibid.

族)の叛徒がブルジェヴァリスク市に近づいた時、市の教会は警報として鐘を鳴らし、ロシア人市民たちは武器を手に教会広場に駆け込んで、死を覚悟して神に祈った<sup>(61)</sup>。この光景は、中央アジアのロシア正教会が現地民を取り込むことができず、ロシア人のものとしてとどまったことを、象徴的に示している。

#### 1-5. 小括

宣教師たちは、慣れない土地で活動するためにも、国策に近い立場で活動するという関係からも、行政側の許可と援助を必要としていたが、許可を得られなかったり、得るのに時間がかかったりすることが多かった。ロシア正教会自体もヒエラルヒーを伴う官僚主義的機関であり、宗務院や主教座をはじめとする様々な組織の合意がなければ活動を進められなかった。対照的にムッラーたちは、行商人や治療師として草原に入り、現地社会に容易に適応しながらイスラームの儀礼や知識を広めていった。ステップ委員会やタウベの文書が示すように、ロシア政府側もムッラーのスタイルの優位を認識していたが、その方法を正教の宣教師たちに模倣・実践させるのは容易ではなかった。1910年のカザン宣教師大会参加者らによれば、当時カザフ語をまともに話せる聖職者はキルギズ宣教団に誰もおらず、衣食の点でもカザフ人の生活になじんでいなかったという<sup>(62)</sup>。

行政官や教会関係者の議論で、カザフ人・クルグズ人とオアシス定住民、ステップ諸州とトルキスタン（この場合セミレチエは前者に含まれる）が常に分けて考えられていたことも特徴的である。しばしば、カザフ人・クルグズ人は「半ムスリム」だから彼らに対する宣教はそれほど危険ではなく、比較的容易に正教化できると考えられた。しかしこの予想は誤っていた。アヴラーミーの場合に限らず、カザフ人らが宣教師の到来や強制改宗の噂に憤慨したという断片的な情報は数多い。カザフ・クルグズの遊牧民たちがイスラームの教義に関して持っていた知識が、オアシス定住民に比べ貧弱だったのは確かである。しかし教義の知識とアイデンティティは別であり、宣教師や宗務協議会の問題への反応から見て、多くの遊牧民は明確なムスリム・アイデンティティを持っていたと考えられる。また、数少ない正教改宗者が、町に住む貧民や、犯罪を犯したりトラブルに巻き込まれたりして同族との関係が断絶した者であったことは<sup>(63)</sup>、共同体に属する限りムスリムであることをやめるのは難しかったことを示唆している。貧民を皮切りに正教を広めるというコルパコフスキーの構想は非現実的であり、カザフ人正教徒は常にマージナルな存在にとどまらざるを得なかった。

結局のところ、宣教によってカザフ人・クルグズ人に対するタタール人ないしイスラームの影響を抑え、彼らをロシア人側に引きつけるという当初の目的の達成見通しが立たないまま、宣教がカザフ人・クルグズ人側の敵意と混乱を呼び起こすことへの警戒心の方がまさり、時と共に宣教の支持者は減っていったのである。

61 RGIA, f. 1276 [Sovet ministrov], op. 11, d. 89, l. 287ob.

62 McCarthy, "The Kazan' Missionary Congress," pp. 321, 327.

63 1870年代にペロフスクでカザフ人の犯罪容疑者が正教改宗を申し出た2例として、TsGA Ruz, f. 17, op. 1, d. 3026, l. 1, 4.

## 2. 中央アジア諸民族の徴兵または民兵隊形成に関する議論

### 2-1. ロシア帝国の中央アジア人将兵

ロシアは古くから非ロシア人の将兵をよく使っていた。17世紀には軍務タタールや西方諸国出身の傭兵をエリートとして取りたてた<sup>(64)</sup>。コサック軍に多くの非ロシア人がいたこと、ナポレオン戦争時のフランス遠征にバシキール人らが参加したことはよく知られている。カザフ人も少数ながらフランス遠征に参加したほか、チョカン・ワリハノフを含め、ハン家などの有力な家系のカザフ人がロシア軍将校になる例は、少なくとも19世紀半ば過ぎまでごく普通に見られた<sup>(65)</sup>。

1860年代の中央アジア征服でも、中央アジア諸民族、特にカザフ人・クルグズ人が補助的な兵力として使われた。彼らは主にジギト（馬に乗って偵察や伝令に携わる者）であったが、時に戦闘にも直接参加し、ロシア人将校から高い評価を受けた<sup>(66)</sup>。1880-81年のアハル・テケ遠征（対トルクメン遠征）には、ジッザフ地区などのカザフ人たちがジギトとして、アムダリヤ支区のトルクメン人が案内人として参加し、褒賞を受けている<sup>(67)</sup>。

元反乱者やその子孫であってもロシアに忠義を尽くした者には、ロシアの鷹揚さを顕示するために、軍での位階や褒賞が与えられることがあった。1837-47年にカザフの大反乱を率いたケネサル・カスマフの子アフメト・ケニサリンは、父の死後コーカンド・ハン国の軍人になっていたが、61年にロシア臣民となり、ロシアの対コーカンド戦を大いに助けた。その功績により最終的には特任中佐 *zauriad-voiskovoi starshina* に昇進し、チムケント郡長補佐も務めた<sup>(68)</sup>。アハル・テケ遠征に対する激烈な抵抗（ギョクデペの戦い）を率いたハンの一人、マフトゥム・クリ・ハンは、戦いの1年8カ月後にロシアに忠誠を誓い、メルヴのテケ族にロシア臣籍取得を説得したことにより、スタニスラフ2級勲章と聖アナ2級勲章を得た。その後テジェン郡長を務め、軍人としては1909年に大佐に昇進した<sup>(69)</sup>。

しかしこれらはあくまで個別の例である。全体の流れとしては、ロシア軍の近代化に伴い、非正規軍での東方諸民族の軍務は縮小していった。バシキール軍は1865年に、ブリヤート・コサック連隊は71年に廃止された。バシキール人がタタール人らと同様に通常の徴兵<sup>(70)</sup>の対象となる一方、カルムイク人やブリヤート人は、コサック軍に残った一部の

64 濱本真実「17世紀ロシアにおける非ロシア正教徒エリート政策」『スラヴ研究』第52号、2005年、63-98頁。

65 *Istoricheskii opyt zashchity Otechestva: Voennaia istoriia Kazakhstana* (Almaty, 1999), pp. 83-97. ボケイ・オルダの最後のハンであるジャンギルの子、グバイドウッラ・ジャンギロフは、露土戦争の戦功により、1878年にカザフ人で（中央アジア人で、と言っても間違いのないだろう）最初の少将となった（のち騎兵大将に昇進）。M. Abdirov, “Kazakhskii general russkoi armii,” *Prostor* 7 (2003) [http://www.nklibrary.freenet.kz/elib/collect/sotrudn/kaz\_general.htm].

66 RGVIA, f. 1396 [Shtab Turkestanskogo voennogo okruga], op. 2, d. 756, l. 30-31ob.

67 TsGA RUz, f. 1 [Kantseliaria Turkestanskogo general-gubernatora], op. 1, d. 1931, l. 2-4

68 TsGA RUz, f. 1, op. 2, d. 56.

69 TsGA RUz, f. 1, op. 2, d. 1215, l. 1-2ob. メルヴ併合における彼の役割について詳しくは M.N. Tikhomirov, *Prisoedinenie Merva k Rossii* (Moscow, 1960). 参照。彼は1906年には第二ドゥーマ議員に選ばれ、17年の革命期にも一定の力を持っていた。

70 兵役は1874年まで新兵供出義務 *rekrutskaiia povinnost'* と呼ばれ、共同体ごとの割り当てであった。同年以降、兵役義務 *voinskaia povinnost'* として帝国臣民の義務（ただし多くの免除規定あり）となった。

者以外は「異族人」として徴兵対象外であり続けた。同じ頃に征服された中央アジア南部と、行政改革が行われた北部（ステップ諸州）では、現地諸民族と軍務の関係についてどのような方針で臨むかが重要な検討課題となる。

## 2-2. 1860-80年代の議論：ステップ委員会、兵役義務法、露清関係

1865年にステップ委員会が設置された際、その検討課題の一つに次のようなものがあった。「この地の住民 [カザフ人]<sup>(71)</sup>の戦闘性を維持させるべきか、それとも逆に彼らを平和な生活に慣らせ、武器から離れさせるよう努めるべきかを判断すること。国内警察および対外的・軍事的任務のためにキルギズ民兵隊 *militiia* を形成するための規則を決めること<sup>(72)</sup>。」しかし、委員会が出した結論は否定的であった。68年初に委員会が提出した「キルギズ・ステップ統治規程案解説覚書」は、「兵役の環境は、無限の自由に慣れている遊牧民の生活様式と相容れない。したがってキルギズ人は新兵供出義務を恐れ、彼らが新兵徴募の前兆と見なす人口調査の噂が流れるだけで動揺が起きる」と指摘する。民兵隊の形成についても、「彼らはこの組織を軍事義務導入に向けた過渡的措置と見なすだろう」とし、カザフ人の志願者が案内人や伝令として軍に役立つことはあるものの、彼らを行軍に参加させる権利は、統治規程に明記せずに現地の軍指導部に与えればよいと述べた<sup>(73)</sup>。

カウフマンは、トルキスタンの現地民には全体として、ロシアの利益を守る任務を与えるに足る信頼性 *blagonadezhnost'* はないが、タジク、「サルト」、「キルギズ」の3民族の中では「キルギズ」が最も軍務に向いており、すばらしい軽騎兵隊を何連隊か作ることができるだろうと述べた。しかしカザフの小ジュズ反乱 (1868-70) の後、彼はカザフ人の「信頼性」への評価をさらに下げたらしく、この提案を保留した<sup>(74)</sup>。

1874年に兵役義務法が施行されると、陸軍省は異族人を徴兵する可能性の検討に着手した。その過程で、関係する軍管区の司令官（総督が兼務）に意見を求めたが、79-80年に彼らが寄せた回答は軒並み否定的であった。オレンブルグ軍管区司令官ニコライ・クリュジャノフスキーは、カザフ人は兵役を避けてヒヴァ・ハン国に逃げるだろうと述べた。西シベリア軍管区司令官ニコライ・カズナコフは、兵役は遊牧民があらゆるものを賭けて守ろうとする自由を奪うことになるので、慎重にすべきだと述べた。カウフマンもすっかり否定的になっていた。彼によれば、さまざまな戦役の経験は、ムスリムの民兵隊や非正規騎馬軍の戦闘能力と信頼性が低いことを示していた。民兵は掠奪を好み、ロシア西部国境で起こりうる殲滅戦には向くが、中央アジアでロシア軍が戦う相手は将来の臣民・保護国民であって、戦地を荒廃させない人道的な戦い方をしなければならないと彼は述

71 以下、引用文中の [ ] 内は宇山による補足。

72 RGVIA, f. 1450, op. 2, d. 12, l. 8ob.

73 RGVIA, f. 400, op. 1, d. 120, l. 62ob.-63. なお、この覚書の抜粋は、ソ連時代に編集された史料集 (Masevich, ed., *Materialy po istorii* [前注 27 参照], pp. 258-278.) に収録されたが、兵役に関する部分は除かれている。また、前述の正教化に関する委員会提案はこの覚書の秘密付属文書だが、やはり収録されていない。

74 後述する 1895 年のフェルガナ州軍本部の委員会議事録から引用。RGVIA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 7ob.

べた<sup>(75)</sup>。またどのような形にせよ軍務は住民に戦闘技術を指導する者を作り出すことになり、ロシアに反抗する運動が起きた際に危険だと彼は考えた。「我々の現在の主要課題は管区のムスリム原住民を平和な農民、手工業者、商人にすることでなければならず、戦士にすることで決してない」というのが彼の信念であった。そして、現在トルキスタン地方は完全に平穏だが、「我々はこの地方を得たことによってムスリム世界の心臓部に入り込んだのであり、この世界はいまだに我々を、[ムスリム世界の] 野蛮ではあるが千年の歴史を持つ秩序を自らの文明によって乱す外来征服者と見ている」ということを忘れてはならないと警告した<sup>(76)</sup>。

数年後、露清関係の緊張によって軍務導入の議論は再燃した。1883年にセミレチエ州軍務知事アレクセイ・フリーデは、国境警備の必要性と、清朝との戦争の可能性を念頭に、州の全住民（ロシア人、ドゥンガン人、「タランチ人」、カザフ人・クルグズ人）の中から非正規騎馬隊を作ることを提案した。人口比に合わせるとカザフ人・クルグズ人の兵が多くなりすぎるので抑えるべきだとしつつも、彼らはトルキスタンの定住民と異なり「狂信主義とは無縁」であり、「キリスト教への改宗の例もかなり多い」こと、「いまだかつて戦闘的な民族であったことはない」ことを根拠に、民兵隊形成の安全性を説いた。そして軍務の段階的導入の積極的意義として、「彼らのロシア化 obrusenie と、原住諸種族の間でのロシア的生活様式、習俗、観念の普及に最も強力に影響する」ことを挙げた<sup>(77)</sup>。

ステップ総督コルパコフスキーも、以前はカザフ人・クルグズ人が反乱を起こし中央アジア諸ハン国の援助を受けることを恐れて兵役が避けられてきたが、諸ハン国が征服された現在は心配ないとして、賛意を示した。しかし総督は、広く兵役の問題を総督府管内全体で議論すべきだと考えたらしく、アクモリンスク州とセミパラチンスク州の行政官たちにも意見を求めた<sup>(78)</sup>。彼らの意見は分かれたが、概ね否定的であった。アクモリンスク州の3郡の長たちは1884年に次のように述べている。

……キルギズ人は外界の影響がほとんど及ばない、部族的な閉ざされた輪の中において、国家の全体的利益にあまり共感していない。ステップ地方と帝国全体のこのような利益の共有の欠如は、キルギズの遊牧という生活様式、地方の経済状態、および現在のキルギズの市民性 *grazhdanstvennost'*<sup>(79)</sup> の低さによって支えられている。……ステップへのロシア人の絶え間

75 このような「人道的」な見方をロシア軍指導者全体が共有していたわけではないことは明らかである。フェルガナ盆地やアハル・テケ・オアシスで婦女子を含む虐殺を行ったミハイル・スコベレフ将軍は、「アジアでは平和の長さは、殺した敵の数に正比例する。敵を激しく叩けば叩くほど、その後長い間彼らは静かである」と述べた。Charles Marvin, *The Russian Advance towards India: Conversations with Skobelev, Ignatieff, and Other Distinguished Russian Generals and Statesmen, on the Central Asian Question* (London, 1882), pp. 98-99.

76 TsGA RK, f. 369, op. 1, d. 5838, l. 1-31; f. 25 [Turgaiskoe oblastnoe pravlenie], op. 1, d. 2280, l. 1-29ob.

77 TsGA RK, f. 369, op. 1, d. 5845, l. 2-21ob.

78 “Vsepoddanneishii otchet Stepnogo General-Gubernatora za 1883 god,” p. 52 (TsGA RK, f. 64, op. 1, d. 125, l. 26ob.); TsGA RK, f. 369, op. 1, d. 5845, l. 1.

79 *grazhdanstvennost'* はロシア帝国において極めて多義的に使われた言葉だが、本稿で引用する範囲では、ある民族の文明的な発展の度合い、秩序意識、ロシアの教養・習慣の習得度といった意味であり、「民度」という日本語に近い。しかし、この言葉の多義性と騙し言葉的な性格を示すため、訳語としては直訳の「市民性」を用いる。



ない植民や、キピトカ [戸] 税や地方税という形での増税は、この施策 [兵役] に対するキルギズの猜疑心を呼び起こさずにはおかない。

……ある程度のロシア式教育を受けて将校として軍に入隊したキルギズ人も、任務に決して適合していない……。遊牧生活と、理解力の極めて低い精神的レベルは、彼らを規律正しい戦士にするための好条件を作りだすことができない。……知的発達水準の低さのため、[彼らは] 義務や責務、誠実さという観念を持ち得ない。

……キルギズ人の兵役は、この民族が遊牧生活から定住生活に移行し、それによって自らの経済状態を幾分か強化し、そして定住生活と共にロシア文化とロシア的市民性が彼らに浸透し、キルギズ人とロシア人の融合 *sliianie* が完了した時に初めて適切となるだろう。……

彼らはまた、カザフ人たちが今よりも自由に暮らし、周辺の諸国から贈り物をもらっていた時代を忘れていないこと、カザフ草原が（中央アジア征服によって）ロシアの領土に囲まれたといっても、その輪は決して強固ではないことを指摘している<sup>(80)</sup>。彼らの言葉からは、遊牧民への軽蔑と共に、ロシアによる支配が必ずしもカザフ人に福利をもたらさない、脆弱なものであることの自覚が窺える。

コルパコフスキーも結局 1885 年に、管轄下 3 州の異族人の兵役は時期尚早であると認めた<sup>(81)</sup>。その背景には、ロシアがイリ占領 (1871-82 年) に見られるような新疆への介入策から、国境地域の安定化を重視する方針に転換し、この議論の出発点だった露清関係が急速に正常化したこともあっただろう。

### 2-3. 1890-1900 年代の議論：対英・アフガン戦争の可能性と民兵隊創設案

1890 年代後半、今度はトルキスタンで、アフガニスタンおよびその背後にいるイギリスとの戦いの可能性を意識した議論が始まった。95 年にピョートル・ヴァンノフスキー陸相が、コサックの部分的代用として偵察・伝令を主任務とするトルキスタン現地民の民兵隊を形成できないかという考えを示したのに応じて、トルキスタン軍管区本部が各州の軍司令官(軍務知事が兼務)に意見を求めたのである<sup>(82)</sup>。サマルカンド州軍司令官代行のイオノフは、アフガン人だけでなくロシア国籍のムスリムも、同じ宗教の信者に害になるような情報をロシア人から隠そうとするから、ロシア人の諜報員は十分な活動ができないとし、ロシアに忠実な現地民に（スパイとして）仲介させる必要を認め、アフガン人を監視するための民兵部隊の形成に賛成した。同時に彼は、ロシアによる征服後 20 年の平和は「サルト」の戦闘能力を弱めたが、遊牧民は厳しい自然と闘い続けているので、1876 年にコーカンドの反乱者プラト・ハンの捕縛の際にクルグズのジギトが見せたような活躍を今も期待できると記している<sup>(83)</sup>。

他方フェルガナ州の軍本部では、この問題を検討するために特別の委員会が作られた。委員会の議事録に記された結論の基本的な考えは、ムスリムの民兵隊は、イギリス人や中

80 TsGA RK, f. 369, op. 1, d. 5845, l. 23-42.

81 TsGA RK, f. 369, op. 1, d. 2089, l. 26-32ob.

82 RGVIA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 1-2ob.

83 Ibid., l. 30-32.

国人と戦う時には有益だろうが、アフガン人などムスリムと戦う際には有害だというものである（ただし、戦争を自らの専門と考えてどんな敵とでも戦うトルクメン人の民兵隊〔後述〕は例外だとされる）。委員会は、カザフ人・クルグズ人がケネサル、サドゥク（ケネサルの子）、アブドゥラフマン・アフタバチ<sup>(84)</sup>らの指導下で幾度も対ロシア反乱を起こしてきたこと、彼らが清朝領の同族たちと連絡を保っていることを強調する。そして、万里の長城に至るステップの遊牧民は「一つの巨大なモンゴル族を構成し、かつてはチンギス・ハンやタメルラン〔ティムール〕の大軍の中核だった」として、「眠っている好戦的種族を目覚めさせて新たな戦闘活動に向かわせるべきだろうか？ モンゴル軍侵入の悲しむべき時代を再来させるべきだろうか？」と大げさに問いかける。委員会の見方では、ロシアの勝利の秘訣は戦術や武装よりもむしろ団結と規律にあり、遊牧民にこの秘密を教えるのは危険なのであった。もっとも委員会は、全面的徴兵への一段階にならないのであれば契約制の民兵隊を作ることを可とするという、やや矛盾する答えも出し、わざわざ「フェルガナ州原住民騎馬民兵隊規程」の案まで作っている。フェルガナ州軍司令官（知事）のアレクサンドル・ポヴァロ＝シュヴェイコフスキーは、遊牧民の戦闘本能を目覚めさせることへの危惧はひどく誇張されていると書き添えながら、委員会の結論をトルキスタン軍管区本部に送った<sup>(85)</sup>。

トルキスタン総督アレクサンドル・ヴレフスキーは1896年11月に、原住民民兵隊は不要という結論を出した。意見を寄せるのが遅れていたシルダリア州軍務知事も、翌年になって、カザフ人・クルグズ人はロシア軍が戦闘で一度負ければすぐに敵に寝返るだろうから部隊を作るのは危険だという考えを述べている<sup>(86)</sup>。

しかしトルキスタン軍管区本部の中には騎馬戦力を増強すべきだという強い意見が残っていた<sup>(87)</sup>。総督がドゥホフスコイに替わると、軍管区本部の将校たちは待っていたかのように、兵役ないし民兵隊創設を支持する長い内部報告を作成した<sup>(88)</sup>。その要点は以下の通りである。

- (1) トルキスタンでロシアが持つ騎馬隊はアフガニスタンとインドのそれと比べはるかに少ないが、「雷のような神々の武器」である騎馬隊を増強して、アフガニスタンに先制攻撃をかければ全インドを動揺させることができる。オグズ・ハン<sup>(89)</sup>やガズナ朝のマフムード<sup>(90)</sup>、チンギス・カンやティムールもこの地域を地元の騎馬隊を使って通ったのであり、山がちな地形は障害にならない。

84 1876年にコーカンド・ハン国でプラト・ハンらと共に反乱を率いたキプチャク人（ステップ遊牧民の系譜を引くフェルガナ盆地のエスニック集団で、現在はウズベク人の一部と見なされる）の有力者で、配下にはクルグズ人も多くいたと見られる。「アフタバチ」（ロシア語史料では *avtobachi* と綴られる）は官廷の官職名で、文字通りには「水差し役」の意味。

85 RGVIA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 6-19.

86 Ibid., l. 23-23ob., 27-29.

87 Ibid., l. 36-36ob.

88 筆者が確認した限りでは4つのヴァージョンがある。作成日が明記されていないものもあるが、内容やファイル内の前後の文書とあわせて判断すると、次のような順番で書かれたと思われる。① RGVIA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 44-51ob. ② Ibid., d. 756, l. 60-62ob. (1898年8月) ③ Ibid., d. 768, l. 1-8. (1898年) ④ Ibid., d. 756, l. 95-101ob. (1899年1月)

89 テュルク系オグズ諸族の起源とイスラーム化に関わる伝説の登場人物。

90 在位 998-1030。アフガニスタンを中心に、イラン、北インドをも支配。

(2) 平和な時代が数十年続いているが、数千年かけて戦闘的本能を植え付けられた遊牧民は、勇敢な騎手であり続けている。他方かつて彼らが持っていた巨大な空間にわたる団結は国境の線引きによって失われ、ロシアの支配は確固たるものとなっており、反乱を恐れる必要はない。時に掠奪行為は起きているが、これと闘うには、不穏な分子の気を掠奪からそらすため軍務に引き入れるのがよい。軍隊は国家秩序の観念を育てるための最良の学校である。

なお、ちょうどこの時(1898年5月)アンディジャン蜂起(ムスリムがイシャーン[スーフイズムの導師]に率いられてロシア軍兵営を襲った事件)が起きているが、その後書かれた第2ヴァージョン以降も、「アンディジャンの事件は……わが国のアジア異族人たちに国家の統一と秩序の観念を育てることに、我々があまりにも気を使ってこなかったことを示している」として、軍事教育の重要性の主張を繰り返している。

報告の最初のヴァージョンは、民兵隊は正規軍より経費がかかり規律が低いので不適切だとして、一般兵役義務の導入を主張していた。それに対し第2ヴァージョンでは、住民の一部なりとも正規軍に徴募すべきだが、民兵隊を作ることも可とした。第3・第4ヴァージョンでは、民兵隊の形成のみを提案している。報告書の余白には、軍管区本部上層の誰か(恐らくは本部長。司令官であるドゥホフスコイとは筆跡が異なる)が、異族人の信頼性を強く疑う内容のコメントを繰り返し書いており、そのために報告書の作成者は、兵役義務に基づく騎馬隊の形成という考えをあきらめざるを得なかったと思われる。

同じ頃、新聞でもカザフ人・クルグズ人騎馬隊の形成が議論されていた。それらの記事はトルキスタン軍管区本部の文書ファイルに綴じ込まれ、部内の議論でも参考にされている。記事の一つの筆者である元オムスク軍管区本部長マスロフは、カザフの馬と騎手のすばらしさを讃え、兵役義務に基づく騎馬隊の創設を支持しつつ、「キルギズ人」の「市民性」が低いこと、彼らが「自分に力があると感じれば……彼らの統治においていくらか複雑な事態[つまり統治への抵抗]を呼び起こしうる」ことから、ロシア人との混合部隊を作るよう提案した。彼はまた、「キルギズ人」は自由な生活を失うと衰弱するから兵役は短い方がよいとしながらも、「兵役義務は、高度に工業化された住民にとっては重荷だが、一年中何もしていない遊牧民にとっては益のみがあり、彼らに仕事と発展をもたらす。特に重要なのは、兵役が彼らにロシア国家への帰属意識を植え付けるということである」と述べた。そして、「戦闘的な遊牧諸民族にとって、戦争は望ましく、なじみのある環境であり、戦場で流される血は、彼らからツァーリと祖国の忠実な僕をより早く作り出すことにひたすら役立つであろう」と結論づけた<sup>(91)</sup>。スルタン・ワリ＝ハン(旧カザフ・ハン家の者だろう)は、強制は避けるべきだがカザフ人騎馬隊の形成には基本的に賛成だと述べる<sup>(92)</sup>。別の記事を書いたニコライ・プーチンツェフなる人物は、「兵役義務はキルギズ人にとって……文明の最良の導き手の一つとなり、……生活習慣の特性を通じて次第に定住に近い状態に導くだろう」と書いている<sup>(93)</sup>。

こうした議論と上記の部内報告が、ドゥホフスコイ総督にまで届いたかどうかは分から

91 *Russkii invalid*, 7 June 1898 (RGVIA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 73).

92 *Novoe vremia*, 29 July 1898 (RGVIA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 76).

93 *Russkii invalid*, 6 June 1899 (RGVIA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 74ob.-75).

ない。しかし別の事情から、事態は少し動くことになった。実は既に1894年にフェルガナ州軍務知事ポヴァロ＝シュヴェイコフスキーが騎馬警備隊の設置を提案し、97年にも3度にわたりその提案を繰り返していた。彼が深く憂慮していたのは、フェルガナでしばしば武装した強盗が現れており、今後、コーカサスの一部に存在するような物騒な状態が生じるのではないかということだった。同時に彼は、治安維持にあたっているはずの現地民行政官が、むしろ「通り抜けることのできないカーテン」によってムスリムの生活をロシア人の目から遮っているとし、騎馬警備隊がそのカーテンを破ることを期待した。しかし当時の総督ヴレフスキーは形式的な理由で提案を却下した。これに関する報告を受けた後任のドゥホフスコイは、提案は「初めて聞く!」、前総督の対応は「奇妙だ?!」と書き込みをし、総督官房に対し、「この措置は必要で急を要する。すべての州にテケ大隊〔後述するトルクメン騎馬大隊のこと〕のような中隊を作る必要がある」と指示を出した<sup>(94)</sup>。

しかし案件が再び軍管区本部に回ると、全く違った形の検討が行われた。軍管区本部は、ロシア人から成る民兵隊ないし警備隊を設置し、特に有事の際には全ロシア人住民に武器を配って原住民の騒擾に対処させるという案を作ったのである。これは、1892年からシルダリア州軍務知事ニコライ・グロデコフの提案によって既に開始されていたロシア人住民の武装化を、さらに拡大させようという考えである<sup>(95)</sup>。しかし99年7月には、これらすべての問題は「当面動かさない」ことになった<sup>(96)</sup>。

1903年になると、事態は急な進展を見せる。財務省が戦争税(兵役に代わるもの)の導入を提起したのを受けて、ニコライ・イヴァノフ総督が、トルキスタン現地民から得られる収入の一部を使って「原住民民兵中隊」を作ることを構想したのである。総督と軍管区本部が陸軍大臣に提出した規程案と解説文書によれば、予定される将校・下士官はロシア人で、現地語を知ることが義務であり、他方兵卒(ジギト)は現地民の志願者で、ロシア語を学ぶことが奨励された。部隊創設の主目的は警察機能にあった。以前ポヴァロ＝シュヴェイコフスキーが述べたのと同じく、強盗・殺人の増加によってトルキスタンがコーカサス化するのではないかという危機感、郷や村の現地民行政官は武器がないため犯罪を防げないばかりか、郡当局が現地事情を知るのを妨げる「カーテン」になっているという認識、しかしロシア人やコサックのみでは現地の言葉や習慣・生活様式が分からず警察機能を果たせないという見方が、部隊創設の根拠とされた。

同時に、構想された民兵中隊には軍事機能も負わされ、戦時は大隊ないし連隊に再編されて、特に迅速で遠距離に及ぶ偵察や急襲に従事するとされた。軍管区本部は、これまでロシア軍の行軍に付き添った中央アジアのジギトたちは、戦う相手が同族や同じ宗教の者であっても信頼性に問題なかったこと、遊牧民は勇敢で精力的な騎手としての天性を保つ

94 RGVIA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 84-87ob.

95 トルキスタンでのロシア人住民の武装化は、植民地当局の現地民に対する警戒心、民族間関係の悪化、武器管理体制の不備といった問題を考える上で重要なテーマである。このテーマはかつてピョートル・ガルーツによって研究され、ガイラト・サパルガリエフによっても若干の知見が付け加えられたが、文書館史料によってさらに補足する余地がある。P.G. Galuzo, *Voorizhenie russkikh pereselentsev v Srednei Azii* (Tashkent, 1926); G.S. Sapargaliev, *Karatel'naia politika tsarizma v Kazakhstane (1905-1917 gg.)* (Alma-Ata, 1966), pp. 70-75.

96 RGVIA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 157-166ob., 171-172, 188, 199, 207.

ていることを強調する。不穏分子は軍務に取り込んだ方がよいという理屈も再び現れている。もっともジギトたちに全面的な信頼が置かれたわけではなく、彼らが退役後に反政府的な目的で住民に軍事知識を教えないよう、できるだけ終身勤務にすべきとされた。ただしそれを強制するのは志願制の原則に反するため、「名誉欲が強いという現地民の性格」をくすぐすしてジギトたちを勤務にとどまらせるべく、勤続年数と成績に細かく応じた賞与・特典・昇進の体系が考案された<sup>(97)</sup>。

イヴァノフ総督は1902年分の皇帝宛て報告書でも民兵中隊設置の提案を行い、ニコライ2世は「この考えに賛成する」と書き込んだ。しかし陸軍省参謀本部は否定的な考えを示した。現地民を信頼できないことの証拠としてタシケント・コレラ暴動(1892年のコレラ流行の際に起きたムスリムと市当局・軍の衝突)とアンディジャン蜂起を挙げ、特にアンディジャン蜂起は、地元のイシャーンとオスマン帝国の密使が手を結んでムスリムの「狂信主義」と汎イスラーム主義を煽りうることを示したと述べる。またコーカサス、特にテレク州(北コーカサス中部)の民兵たちが露土戦争さなかの1877-78年に反乱者の列に加わり、その鎮圧のために軍を前線から引き離さなければならなかったこと(これは軍人が非常にいやがることである)、コーカサスに民兵隊が存在した時期に犯罪はむしろ増えたことを指摘した。参謀本部は、ツァーリの意向に配慮して、ロシア人の移民とロシア式の学校が増えてトルキスタン住民とロシアの利益が結合されれば民兵隊の創設は可能になるだろうとしつつ、ただしそれは「今ではなく数年後」のことだと結論づけた<sup>(98)</sup>。

アレクセイ・クロバトキン陸相は参謀本部の報告書の内容を事実上無視して、「トルキスタンの各州に民兵中隊一個を置くことは時宜にかなうと考える。ただしキルギズ人住民から編制すること」という決裁を下した。しかし間もなく日露戦争が始まり、クロバトキンは満洲軍総司令官に任命された。後任のヴィクトル・サハロフ陸相が、陸軍省としては民兵隊創設に賛成だとしてうえてヴラジーミル・ココフツェフ財務相に意見を聞いたところ、ココフツェフは1904年5月に、国家評議会がトルキスタンでの戦争税導入を延期したことを伝え、さらに戦争税が特定の地方のために使われるのは予算規則に反するから自分としては反対だと返答した。参謀本部がこれを新任のトルキスタン総督ニコライ・テヴァシヨフに転送し、当面この問題を放置することに賛成という答を得たうえで、1905年1月に陸相がツァーリに、民兵隊創設は「より好適な状況になるまで延期する」旨の覚書を提出した<sup>(99)</sup>。当時のロシアでしばしばあったように、専制国家とは言っても、ツァーリの意向だけで予算規則や官僚の方針を変えることはできなかったのである。

日露戦争後の状況は、民兵隊創設にとって「より好適」にはならなかった。1907年に英露協商が結ばれ、一連の議論の出発点だった英露関係の緊張は解消したのである。その後、09年分の皇帝宛て報告書でトルキスタン総督アレクサンドル・サムソフが再びカザフ人・クルグズ人の騎馬民兵隊創設を提案したが<sup>(100)</sup>、それ自体としては本格的な議論の対象にならなかったようである。以後、中央アジア諸民族の兵役をめぐる議論は、後述する

97 RGVIA, f. 400, op. 1, d. 3165, l. 1-20.

98 Ibid., l. 21ob.-27.

99 Ibid., l. 21, 32-38ob.

100 Kh.T. Tursunov, *Vosstanie 1916 goda v Srednei Azii i Kazakhstane* (Tashkent, 1962), p. 183.

ような別の文脈で展開する。

#### 2-4. トルクメン騎馬連隊

ここで、実は中央アジア現地民の民兵隊が既に一つだけ存在していたということに言及したい。トルクメン人の部隊である。これは1885年2月にトルクメン騎馬民兵隊として創設され、92年にトルクメン騎馬非正規大隊に改組、さらに1911年にトルクメン騎馬大隊、14年にトルクメン騎馬連隊、16年にテケ騎馬連隊（テケは大半の隊員の出身部族名）に改名・改組され、18年まで存続した<sup>(101)</sup>。将校たちは主にロシア人である。この部隊は、平時は地元で警察業務、国境警備や隣国の偵察に従事していた<sup>(102)</sup>。

これは一見奇妙なことに思える。トルクメン人はロシアによる中央アジア征服に最も激しく抵抗したうえ、以前からイランなど周辺諸国に出かけては掠奪行為（アラマン）を働いていたことで有名で、ロシア文化の浸透度も低く、「信頼性」や「市民性」は低いはずなのに、ギョクデペの戦いの4年後、トルクメニスタン南端部の併合がまだ完了していない時点で、民兵隊が作られたのである。

実のところ、ロシアの軍人たちが注目したのは、まさにギョクデペの戦いなどでトルクメン人が見せた頑強な戦いぶりであった。前述したフェルガナ州軍本部の委員会の言葉に見られるように、どのような厳しい条件でも、どんな敵とでも戦う戦士たちという評判が定着したのである。また、戦いや掠奪を好むトルクメン人を軍隊に入れておいた方が治安維持のためによいという判断もあった<sup>(103)</sup>。さらに恐らくは、トルクメン人地域（ザカスピ州）の地政学的重要性も作用していたと思われる。ロシア領中央アジアの対イラン・アフガニスタン国境は、フェルガナ州の山岳地帯（パミール）と、保護国であるブハラ・アミール国を除けば、すべてこのザカスピ州が占めていたのである。なお、この騎馬隊もあくまで志願制であり、通常の徴兵の対象外に置かれた点ではトルクメン人も他の中央アジア諸民族・異族人と変わらない。

トルクメン騎馬連隊がオーストリア軍・ドイツ軍と勇敢に戦っていた第一次世界大戦中の1915年2月、総司令部本局は「キルギズ人」の志願兵をトルクメン騎馬連隊の予備中隊に編入することを提案した。これに猛反発したのが参謀本部アジア部長である。彼は、「キルギズ人」が純粋な遊牧民であるのに対し、トルクメン人、特に連隊の中核をなす「アハル人」（テケ族のこと）の生活様式は定住民に近いので一緒に勤務しにくいとし、さらに「トルクメン人は騎兵として一流の素材だが、キルギズ人は……どちらかといえば二流」であり、疲れを知らない騎手ではあっても勇敢な戦士とは呼べないので、彼らを入れるとトルクメン中隊の質を下げることになる」と主張した<sup>(104)</sup>。トルクメン人は生業形態では遊牧民（カザフ人・クルグズ人）と定住民（ウズベク人・タジク人）の中間で、ロシア文化からの距離は最も遠い部類に属していたが、軍事面では中央アジア諸民族の中で最高位に置かれていたことになる。

101 RGVA, f. 3639 [Tekinskii konnyi polk], op. 1 の解説文 (Predislovie)。

102 RGVA, f. 400, op. 1, d. 1408, l. 3-12ob., 46-47.

103 RGVA, f. 1396, op. 2, d. 756, l. 9-9ob.

104 RGVA, f. 400, op. 1, d. 4413, l. 11-13.

テケ騎馬連隊は、17年8月には通称「野蛮師団」（北コーカサス諸民族およびアゼルバイジャン人の志願兵から編制。正式名はコーカサス原住民騎馬師団）と共に、ラヴル・コルニロフ将軍による臨時政府に対する反乱に参加し、一部はその後もボリシェヴィキと戦って、その波乱に満ちた歴史を終える<sup>(105)</sup>。

## 2-5. 1910年代の議論：ロシア人の「不公平感」から1916年反乱へ

話を1910年前後に戻そう。この頃、異族人の徴兵を望む声が陸軍省とドゥーマを中心に始まっていた。その背景には、ロシア帝国の中で中央部が貧窮化 *oskudenie* し、全国的にもロシア人が不利な状況に置かれているという当時の右派の認識があった。国防においてもロシア人が不当に大きな負担を負っているため、他の民族に負担を分け、同時に彼らのロシア化を進めるべきだということである<sup>(106)</sup>。兵役免除対象の民族の一部からも、兵役を引き受けようという声があがった。11年11月にドゥーマで演説したアゼルバイジャン人のハリルベク・ハスママドフ議員は、ザカフカジエのムスリムが同じ場所に住むキリスト教徒とは違って兵役を免除され、そのかわりに特別税を払わされているのは、彼らが「共通の祖国の息子ではなく継子」として見られていることを示し、彼らを国家から引き離しうものだとし、兵役対象への編入を求めた<sup>(107)</sup>。

こうした流れの中で、セミレチエ州軍務知事ミハイル・フォリバウムは1910年分の皇帝宛て報告書でカザフ人・クルグズ人の徴兵が必要だと述べ、ニコライ2世は「[結論として]これに到達する必要がある」と書き込んだ。しかしロシア系移民のための土地没収により現地民がロシアに対し不満・不信を抱いている現状では、徴兵は時期尚早であるとする、トルキスタン総督サムソノフの意見などにより、徴兵案は立ち消えとなった<sup>(108)</sup>。

これ以降、兵役をめぐる議論は政府部内だけでなく、カザフ人の間でも展開される。当時カザフ人の一部にはロシア政府の勧めに従って遊牧をやめ定住化する動きがあったが、その際、定住化すると兵役に就かされるのではないかと恐れる声があがっていた。これに対しカザフ知識人のアリハン・ボケイハン（ブケイハノフ）は1913年5月の『カザフ』紙で、カザフ人の兵役免除を決めた法令を列挙し、それらを改正する法案はドゥーマにも国家評議会にも出されていない、また定住化しても自ら希望しない限り農民身分には編入されないから、定住化で兵役義務を負うことにはならない、と説明した<sup>(109)</sup>。

大戦開始時、陸軍省は徴兵対象拡大の本格的検討に入っていた。1914年7月に陸軍省

105 O. Gundogdyev and Dzh. Annaorazov, *Slava i tragediia: Sud'ba Tekinskogo komogo polka (1914-1918)* (Ashgabat, 1992).

106 Sanborn, *Drafting the Russian Nation*, pp. 71-74.

107 *Gosudarstvennaia Duma, Tretii sozyv: Stenograficheskie otchety, 1911 g., Sessia piataia, chast' 1* (St. Petersburg, 1911), pp. 2933-2936.

108 Tursunov, *Vosstanie 1916 goda*, pp. 181-184.

109 Qir balasi (= Ä. Bökeykhan), "Qazaqtan saldat ala ma?" *Qazaq* 13 (8 May 1913), p. 1. ドゥラトフは、トムスク県、トボリスク県やアクモリンスク州で農民身分や町人身分に入ったカザフ人が徴兵された例があるが、違法ではないかと述べている。M.D. (= M. Dulatov), "Qazaqtan saldat alına ma?" *Qazaq* 60 (30 April 1913), p. 4. 「アクモリンスク・セミパラチンスク・セミレチエ・ウラリシク・トルガイ諸州統治規程」第12条は、ロシア正教に改宗した異族人は希望により都市やロシア人村に戸籍を得ることができるが、兵役義務からは一生免除されると定めている。 *Svod zakonov Rossiiskoi Imperii*, 2nd ed., kniga 1-ia (St. Petersburg, 1913), p. 1165.

が大臣会議に提出した秘密報告は、「辺境のために国家中央の住民に兵役義務の重荷を負わせるのは全く不公平であり、辺境の住民は中央を犠牲にして発展し豊かになっている」と述べる。しかしカザフ人・クルグズ人の場合は、彼らの兵役免除がロシア人の重荷を増やしてはいるが、その分彼らの土地をロシア人のために取り上げることで埋め合わせていること、カザフ人・クルグズ人は信頼性が低く危険なうえ、彼らの健康を支えている食物やクムズ（低アルコールの発酵馬乳）を得られない環境で兵役に就かせても、病気になって野戦病院の負担になるだけであることから、兵役免除を続けるべきとされた。「サルト」らトルキスタンの定住民についても、信頼性が低い（特にオスマン帝国との戦いでは寝返る危険がある）など類似の理由で兵役免除としている。北コーカサスの山岳民については、戦士としての資質を買って徴兵可と述べていた<sup>(110)</sup>。

陸軍省のほかにも移民局、ドゥーマのムスリム議員、『ワクト』（オレンブルグ）や『トルムシュ』（ウファ）などタタール人の新聞も、兵役免除の諸民族、特にその中で最大の集団である「キルギズ人」の徴兵を唱えた。カザフ人の一部にも賛成意見があった。だが『カザフ』紙は、このあいだまで「カザフ人は蒙昧で兵役に就いていないからゼムストヴォを与えない」と言っていたのに、徴兵を意図すると「カザフ人は決して蒙昧ではない」と言う政府機関の御都合主義を鋭く突いている<sup>(111)</sup>。

『ワクト』、『トルムシュ』やムスリム議員たちは、全面的な動員が進む中で大民族であるカザフ人が兵役を免れているのは他民族の不満を呼びかねないと考えた。兵役という市民的義務を負えば、ゼムストヴォを獲得し、ドゥーマへの代議権を回復し、宗教上の権利や、コサック並みの土地に対する権利を得るのに役立つ、また兵士となることで世界を見、カザフの文化水準を向上させられる、というのが彼らの意見であった。これに対し『カザフ』紙は、彼らは善意に基づく意見を述べてはいるがカザフの事情を知らない、カザフには戸籍がなく、家族台帳 *posemeinyi spisok* にもアウル長が各人の年齢を恣意的に書いているため、徴兵対象年齢の者を確定できない、ただし志願兵制にすればこの問題は起こらない、と指摘している<sup>(112)</sup>。のちに各地での反乱のきっかけの一つとなったのも、まさにこの、戸籍がなく労役徴用対象者を郷長らが都合のいいように決めてしまうという問題であった。

1915年7-8月、ドゥーマの秘密会で徴兵対象拡大についての議論が再び展開された。オクチャブリストで聖職者のトレグボフ議員は、これまで兵役を免除されてきた民族が戦争の目的を理解していようがまいが、ロシア人と同じ負担を負わせるべきだと述べた。カデットのアンドレイ・シンガリョフ議員は、ロシア国民 *natsiia* を構成する諸民族

110 M. Zakharov, "Tsarskoe pravitel'stvo i voennaia sluzhba gortsev i zhitelei Srednei Azii," *Voennyi vestnik: voenno-politicheskii ezhenedel'nik* 20 (30 May 1925), pp. 8-10.

111 "Qazaqtan saldat alu turali," *Qazaq* 154 (22 October 1915), pp. 1-2.

112 "Qazaqtan saldat alu," *Qazaq* 153 (15 October 1915), p. 3; "Qazaqtan saldat alu turali," *Qazaq* 154 (22 October 1915), pp. 1-2; "Qazaqtan saldat alu mäsesinde noghay gazetalarining fikiri," *Ibid.*, pp. 3-4. カザフ知識人ムハメドジャン・トゥヌシュバエフが1917年にクロパトキン総督宛に書いた供述書によれば、カザフ人・クルグズ人で実際に志願兵として戦場に赴いたのは、ブルジェヴェリスク郡とビシベク郡東部のクルグズだけだった。これらの地域は、皮肉にも16年に特に激しい蜂起が発生した場所と重なっている。M. Tynyshepaev, *Istoriia kazakhskogo naroda* (Almaty, 1993), pp. 40, 45.



narody i narodnosti の中にロシア語を解さない者が多いことは徴兵に困難をもたらすはするが、4～5カ月もすればロシア語を覚えるだろう、という「国民統合」を意識した言い方をしつつ、やはり異族人の徴兵を求めた<sup>(113)</sup>。

恐らくはこうしたドゥーマの圧力も作用して、陸軍省は15年11月に徴兵対象拡大に関する法案を大臣会議に提出した。法案では、それまで兵役免除とされていた諸グループを細かく地域別・民族別に分けて検討した。遠隔地のロシア人のうち、シベリア北辺の住民は免除を続けるが、トルキスタンの基幹3州（シルダリア、サマルカンド、フェルガナ）<sup>(114)</sup>とサハリン州のロシア人は徴兵すべきとされた。中央アジア諸民族については、前年の秘密報告と同様の否定的な事情を挙げておきながら、カザフ人・クルグズ人（トルクメン人も同様とされる）については、兵役を負わせてこそロシア人との接近 sbliuzhenie を図れる、兵役に反発する蜂起が発生しても迅速に鎮圧できるという理由で、また「サルト」などその他の民族については「全く戦闘的ではない」（つまり反抗する心配がない）という理由で、強引に徴兵可と結論づけた。全体として、フィンランド人やシベリアのごく一部の民族、トルコ人などを除いてほとんどの帝国臣民を徴兵対象にするという法案であった。しかし、11月27日の大臣会議では、ステパン・ベレツキー内務次官が、異族人、特にカザフ人・クルグズ人にはロシアを祖国とする意識がなく、徴兵すれば騒動が起きる可能性があるとして強く反対し、法案審議は延期された<sup>(115)</sup>。

このような政府部内の検討過程を知らされないまま、カザフ人の間では、1916年2月からのドゥーマの会期で兵役に関する法案が出るという観測が流れた。『カザフ』紙には、徴兵はカザフ独自の部隊の設置、ゼムストヴォの開設、学校の増設、代議権の回復を前提条件とすべきだとの提案を含め、各地から意見が寄せられた<sup>(116)</sup>。意見の最大公約数的な部分は、ミルヤクブ・ドゥラトフのまとめに従えば、「①今次戦争においてはカザフ人を徴兵しない。②徴兵する前に戸籍を整備するため、[カザフ人は] ムフティー州<sup>(117)</sup>の管轄に入る。③やむを得ず徴兵する場合は歩兵ではなく騎兵とし、土地・水利および権利においてコサックと同等とする」というものであった。こうした意見を伝えるため、ボケイハン、アフメド・バイトゥルスノフ、ヌサンガリ・ベギムベトフの3人がペトログラードへ赴いた<sup>(118)</sup>。

アレクセイ・ポリヴァノフ陸相やドゥーマの議員たちと会ったボケイハンは、『カザフ』

113 Sanborn, *Drafting the Russian Nation*, p. 77.

114 これら3州およびブハラ・アミール国のロシア人が兵役免除とされていた理由を明確に記した史料は見つけていないが、恐らくは、この地域の希少なロシア人勢力を維持すべきという考えからだったろう（15年の法案は逆に、「原住民」からの自衛のためにこの地のロシア人に兵役の経験を積ませる必要があると説く）。同じトルキスタン地方でもセミレチエ州とザカスピ州のロシア人は徴兵対象だったが、この区別は必ずしも現地で徹底しておらず、召集年齢（21歳）の者がいったん免除を認められながら後で取り消されることがあった。また3州への転入・転出時の年齢によっても扱いが異なる関係で、さまざまな混乱が生じていた。明らかなのは、免除が認められるなら免除してほしいという者はロシア人にも多かったということである。TsGA RUz, f. 1, op. 2, d. 1099.

115 RGIA, f. 1276, op. 11, d. 89, l. 1-27.

116 “Saldattiq mäselesi,” *Qazaq* 166 (24 January 1916), p. 1.

117 恐らくオレンブルグ宗務協議会を指すものと思われる。

118 M.D., “G. Duma häm saldattiq mäselesi,” *Qazaq* 168 (9 February 1916), p. 1; *Vosstanie 1916 goda v Kazakhstane (Dokumenty i materialy)* (Alma-Ata, 1947), p. 22.

紙に、徴兵法案は作られておらず、ムスリム議員も徴兵を強く唱えているわけではないこと、今次戦争での徴兵は見込まれないこと、しかしオクチャプリストやロシア民族主義者など右派の議員が異族人徴兵を唱えており、将来に向けて法案が作られる可能性は大であることを伝えた。そして一口に兵士と言っても、歩兵、騎兵、コサックの3種類があって、コサックの生活はカザフ人と似ており、実際カザフ人はコサックを身近に見てもいる、従ってコサックとして兵役に就くことを働きかけよう、と呼びかけた<sup>(119)</sup>。これに対しては、コサック身分になると軍服・馬・装備などを自分で用意しなければならないから生活を圧迫する、歩兵になった方がよい、という反論も寄せられた<sup>(120)</sup>。

こうした中央アジア人側の反応とは無関係に、政府内では突然の方針転換が起きた。4月24日の最高総司令官本部特別審議会が、戦線後方の労働力が100万人不足していると提起したのを受けて、大臣会議は5月3日・6日、6月14日の閣議で、異族人を兵士としてではなく労役者として動員する可能性を検討し、武器を与えないからこの方が安全だという結論に達した<sup>(121)</sup>。そして早くも6月25日、「野戦軍地区における防御施設、軍事交通・通信の設営作業ならびに国防に必要なその他あらゆる作業への帝国の異族人男子住民の徴用に関する」勅令が出されたのである。

ロシア軍が召集した兵員の総数が1915年9月1日には1016万8000人、1916年11月1日になると1429万3000人に達するという状況の中で、むしろ労働力の不足が深刻になっており<sup>(122)</sup>、兵役に出た経験のない異族人を労役に回すという判断には、それなりの合理性があったろう。しかし、当該民族はおろか総督ら地方行政官とも相談せず、性急に下されたこの決定の効果は破滅的であった。農作業にとって大事な時期に多数の成年男子を遠い土地に動員するという突然の命令が住民に衝撃を与えただけでなく、労役の内容も正確に伝わらなかった。一部では皇帝が命じているのは銃弾の飛び交うなか塹壕を掘る最も危険な仕事だという噂が流れ、また大多数の人々は、労役というのは口実で実際は兵役に取られるのだと思った<sup>(123)</sup>。7月4日にフジャンドで始まった反乱は、またたく間に中央アジア全土に波及し、特にセミレチエではロシア人との間の悲惨な民族紛争が起きた。しかし、合法性の疑われる労役命令を出した政府の責任を問う声がドゥーマで高まると、内務省と陸軍省は互いに責任のなすりつけ合いを始めた<sup>(124)</sup>。まさに無責任体制の極みであった。

トルキスタン現地で反乱の鎮圧に当たったクロパトキン総督は、8月23日付の命令で、「ロシア人が〔戦争で〕困難を経験している今、トルキスタンの原住民は、ロシア政府が

119 “Petrograd khatī, I. Saldat alar ma?” *Qazaq* 171 (29 February 1916), p. 1; “Petrograd khatī, II. Ne isteuge?” *Qazaq* 172 (9 March 1916), pp. 1-2.

120 Q., “Åsker alsā,” *Qazaq* 177 (17 April 1916), pp. 2-3.

121 Tursunov, *Vosstanie 1916 goda*, pp. 185-189; *Padenie tsarskogo rezhima: stenograficheskie otchety doprosov i pokazanii, dannykh v 1917 g. v Chrezvychainoi Sledstvennoi Komissii Vremennogo Pravitel'stva*, t. 7 (Leningrad, 1927), pp. 290-295 (dopros gen. D. S. Shuvaeva).

122 和田春樹「第一次世界大戦」田中陽兒・倉持俊一・和田春樹編『世界歴史大系 ロシア史3：20世紀』山川出版社、1997年、22-23頁。

123 Tynyshpaev, *Istoriia kazakhskogo naroda*, p. 41; *Vosstanie 1916 goda v Srednei Azii i Kazakhstane: Sbornik dokumentov* (Moscow, 1960), pp. 496, 504.

124 RGIA, f. 1276, op. 11, d. 89, l. 322-331ob.

彼らのために行ってきた気遣いと、彼らの繁栄のために基幹的ロシア人住民が払ってきた犠牲を思い出すべきである」として労役の遂行を求めた<sup>(125)</sup>。クロパトキンはかつて著書『ロシア軍の課題』で、ロシアの富が国内の非ロシア人や外国人に奪われているとして、「ロシア人のためのロシア」をスローガンとするロシアの再興を唱えたことがある<sup>(126)</sup>。その際に彼が問題にしていた非ロシア人は主にユダヤ人、ポーランド人、ドイツ人であるが、彼がザカスピ州長官時代（1890-98）以来久しぶりに着任した中央アジアでも、ロシア人が中央アジアのために払った「犠牲」に見合う負担を「原住民」に求めたのである。同時に彼は、中央アジア人にそれぞれの民族性に合わせた役割を与えようとしていた。上記の命令ではトルクメン人に、他の労役者とは違い武器を持って警備の仕事をするよう求めていたし、「生来の遊牧民」であるクルグズ人に関しては、彼の日記に記されているように、ロシア人の血が流された土地から彼らを追放・隔離したうえで、定住化させるのではなく軍馬の飼育者・羊の供出者、そして騎兵として国家に貢献させようと構想したのである<sup>(127)</sup>。

## 2-6. 小括

半世紀にわたり問題設定と文脈をさまざまに変えながら続けられた、中央アジア諸民族の兵役に関する議論は、ロシアの行政官・軍人が中央アジア統治について持っていた考えのいくつかの特徴を明らかにしてくれる。兵役が「ロシア化」ないし「ロシア人との接近」につながるという考えは、多くの官吏に共有されていた。しかし同時に、中央アジア諸民族は「信頼性」や「市民性」が低いからロシアの防衛に参加させるべきではない、ないし兵役の導入自体が騒擾を呼び起こしうる、という懸念も広く共有されていた。兵役を導入すればこれらの民族の市民性が向上しロシア化されるのか、それとも彼らの市民性とロシア化が一定の度合いに達して初めて兵役が可能になるのか、という「鶏と卵」の議論の中で、結局は兵役導入反対の意見が常に通っていた。

ただし議論の過程は、ロシアと清朝やアフガニスタンとの関係、あるいは第一次世界大戦といった国際環境によってかなり左右された。「信頼性」や「市民性」の点では疑問があるはずのトルクメン人から唯一の民兵隊が組織されたことや、第一次世界大戦中に異族人徴兵法案が一度は作成され、結局は労役という形で動員が行われたことは、内政上の通常の思考回路が、軍事的要請によって大きく組み替えられ得たことを示している。

一連の議論のもう一つの顕著な特徴は、戦士としての勇敢さや「戦闘性」、「信頼性」、「市民性」などが、個人の特質というよりは民族の特性（または、生業形態に基づく遊牧民・定住民の違い）として論じられていたことである。しかも、論者によって個々の民族への評価は異なったものの、1860年代から1910年代に至るまで全体的な評価の傾向はあまり変わらなかった。遊牧民の性格を論じるには、チンギス・カンやティムール、数十年前の反乱といった「過去」が頻繁に参照された。

125 TsGA RUz, f. 1044 [Turkestanskii komitet Vremennogo Pravitel'stva], op. 1, d. 4, l. 10-11ob.

126 A. N. Kuropatkin, *Zadachi russkoi armii*, t. 3 (St. Petersburg, 1910).

127 “Vosstanie 1916 g. v Srednei Azii,” *Krasnyi Arkhiv*, t. 34 (1929), pp. 60-61; 西山克典『ロシア革命と東方辺境地域：「帝国」秩序からの自立を求めて』北海道大学図書刊行会、2002年、187-188頁。

中央アジア諸民族、特に遊牧民に兵役を課することが妥当かどうかは、その後ロシア革命・内戦期、ソヴェト期初期を通じて時折議論されたが、最終的には、1925年に特に混乱もなく全面的徴兵制が施行された。もちろん時代状況は帝政期と大きく違うが、このことは、固定的な「民族性」評価によって徴兵の可否を論じることが有効ではなかったことを示唆している。

### 結論：臣民への猜疑心とオリエンタリズム的個別主義

正教化の議論においても兵役の議論においても、中央アジア諸民族が「ロシア化」するのは望ましいことだという観念は、広く共有されていた。しかし、それを決然とした意志で実行しようという姿勢はほとんどなかった。むしろ、それによって騒乱が起こる可能性への懸念が強かった。行政官・軍人たちは、ロシア人と同じ帝国臣民であるはずの中央アジア諸民族（そして、タタール人やユダヤ人、ポーランド人、ドイツ人、コーカサス諸民族など）への猜疑心を最後まで解かなかった。彼らの関心は、無理な統合・ロシア化を積極的に進めるよりは、その時点での消極的な安定を保つことにあったと言えよう<sup>(128)</sup>。

もちろん、時代による変化は見逃せない。正教化の意欲が時代と共にますます後退したのに対し、非ロシア人にロシア人と同様の義務負担を求める動きは帝政末期に強まった。これは、各種の特典によって異民族を懐柔する古い帝国統合の発想から脱却して、国民に平等な義務を課す国民国家に移行する動きと言えなくもない。しかしその背後にはしばしば、ロシア人が一方的に持ち始めた「不公平感」をもとに、非ロシア人に少しでも有利なことはやめようというロシア民族主義のマイナス思考が、露骨に見えていた。しかも、非ロシア人側が（自らの権利向上を目的として）積極的に負担を負おうとしても、政府側の反応は鈍かった。政府側は、文化的にも政治的立場としても政府と非ロシア人を結びうる民族知識人やドゥーマの非ロシア人議員を、パイプ役として積極的に使おうとはせず<sup>(129)</sup>、秘密主義的な政策決定の方法を維持した。こうして、中途半端な国民国家化とロシア民族主義志向、そして専制体制の護持を同時に推し進めようとして暴走した結果の一つが、1916年反乱を惹起した勅令である。

以上のことを確認したうえで、正教化および兵役の議論からもう一つ重要な要素を抽出したい。それは、これらの議論において、ロシア人と非ロシア人の違いが強調されただけでなく、「キルギズ」と「サルト」とトルクメンが常に区別され、また彼らがタタール人と

128 なんらかの民族や社会集団を敵に仕立てて、その他の集団に恩を売る行為を繰り返すという、松里の言う「エスノ・ボナパルティズム」(Matsuzato, “General-gubernatorstva”[前注6参照])も、場合によっては一種の統合策になるかも知れない。しかしロシア人と現地民の文化的・社会的距離が遠く、現地民の間に構図のはっきりした対立があまりない中央アジアで、「エスノ・ボナパルティズム」的統合は成功し難かった。カザフ草原では、タタール人を敵としてカザフ人の「純粋性」を褒め上げたり、郷長ら現地有力者を糾弾して貧民の味方をしたりするポーズも取られたが(Uyama, “A Strategic Alliance”参照)、20世紀に入ると大規模に流入するロシア人移民の利益を優先することになり、現地民に恩を売る姿勢は消えていった。

129 ムスリムのジャディード(改革派)知識人は、保守的なウラマー(イスラーム学識者)以上に政府の疑いの対象となっていた。Robert Geraci, “Russian Orientalism at an Impasse: Tsarist Education Policy and the 1910 Conference on Islam,” in Brower and Lazzerini, eds., *Russia's Orient* [前注37参照], pp. 138-161.

も、シベリアやコーカサスの各民族とも、いわんや帝国西部の諸民族とも常に明確に区別して扱われていたという点である。これを、「はじめに」で述べたようにしばしば帝国論のキーワードとされている「普遍主義」と対比して、「個別主義」と呼ぼう<sup>(130)</sup>。ここで言いたいのは、帝国内の多様な状況から多様な統治方法が自然に生じたというような、原初的な状態のことではない（それなら「主義」と呼ぶ必要はない）。むしろ、政策の実施方法ないし実施の可否を、個々の地域や民族などについてそれぞれ別個に決めなければならないという、強迫観念のようなものである。少なからぬ官吏たちが、こうした個別の対応を取らなければ、反乱や特定の民族の衰弱といった悲劇的な事態が起こると信じていたのである。

個別主義は一面では、専制的な帝国の性格に由来している。専制帝国では、服属した国や集団は君主に対して個別に忠誠を誓い、それぞれ特定の特権と義務を与えられた。このシステムは時に身分と結びついており、ロシアでは18世紀から、ある民族集団がコサック身分に編入されたり、兵役を免除されたりする場合があった。しかし19世紀半ば以降の個別主義的対応はそれに加えて、「サルト」は「狂信的」で「キルギズ」は「半ムスリム」である、遊牧民は「戦闘的」であるといった、各民族や、遊牧民・定住民についてのステレオタイプと強く結びついていた。既に述べたようにこうしたステレオタイプには根拠薄弱であったり意見の分かれるものが多かったが、これらは決して単に無知な軍人・役人の偏見ではなく、擬似学術的な言説に支えられ再生産されていた。当時の軍人・役人の世界とアカデミズムは密接に関連しており、カウフマンらが学術研究のパトロンであっただけでなく、グロデコフらは自らが学者であったし、参謀本部アジア部は帝国のアジア地域についての専門家集団と見なされていた。このように専門知に支えられ、民族性や地域性を過剰なまでに重視する態度は、まさにオリエンタリズムの精神と言えよう。

エドワード・サイードらのオリエンタリズム論は通常、西洋が東洋全般を他者として異化したことを強調するが、実際には東洋学者（オリエンタリスト）たちは、東洋一般というよりは個別の地域・民族の特殊性や類型を研究していた。サイード自身、近代オリエンタリズムの成立を準備した要素の一つとして、「自然と人間とを類型に分類してやまぬあらゆる衝動」を挙げており<sup>(131)</sup>、「異化」と「分類」はオリエンタリズムの重要な二側面と言ってよいだろう。このことは、ベネディクト・アンダーソンの言う「なにごと（混乱しながら）分類してやまない植民地国家の精神<sup>(132)</sup>」とも結びつく。イギリスは植民地インドの多様性を強調し<sup>(133)</sup>、アフリカでも自らの「伝統」に誇りを持つイギリス人行政官たちは、現地で伝統的であると見て取ったものに好意を持ち、部族や慣習法などの「伝統」

130 筆者が「個別主義」という発想に至った根拠の一つは、ロシア帝国「辺境」諸地域の統治の基本法規である統治規程類が、それぞれ異なる特徴を持つだけでなく、一つの規程の中にも地域・民族・身分の諸原理が極めて複雑に錯綜していたという事実である。これについては稿を改める必要があるが、とりあえず、宇山智彦「帝政ロシア地方統治規程」小松他編『中央ユーラシアを知る事典』360-361頁、参照。

131 エドワード・W・サイード著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年、123頁。

132 ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年、277頁。

133 バーナード・S・コーン著、多和田裕司訳「ヴィクトリア朝インドにおける権威の表象」エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編『創られた伝統』紀伊國屋書店、1992年、260、284-285、296-297頁。

と部族ごとの文化を創造したという<sup>(134)</sup>。カザフ草原で植民地当局によって行われていた慣習法の変質ないし創造、カザフ文化とタタール文化の違いを証拠立てる口承文芸の公刊といった作業も<sup>(135)</sup>、本稿で取り上げた政策的議論と重なり合いながら民族的個性を強調していた。このように、ロシア帝国の「個別主義」は、専制帝国と植民地主義という両面から理解することができる。

ただしロシアの軍人・役人たちは時に、一見普遍主義的なイデオロムも使った。その代表例が「市民性」である。しかしこれは一種の騙し言葉であり、文字通りの市民的権利意識や公德心の意味ではなく、文明的発展のレベルの意味で使われ、しかもある民族の「市民性」を向上させることに力を注ぐという趣旨よりは、「市民性」が低いから一般的なルールを適用しないという趣旨で使われることが多かった。

地域を越えての比較も時に行われ、中央アジアについての議論では特にヴォルガ・ウラルやコーカサスがよく引き合いに出された。しかしそこで語られたのは多くの場合、宣教師はキリスト教徒に囲まれて生活するタタール人に対しても無力なのだからトルキスタンで成功するはずがないとか、民兵隊の欠陥は北コーカサスで証明されているといったネガティブなケースであった。コーカサスで限定的な規模ながらムスリム（オセト、アブハズ、キストなど）の正教化に成功したことが中央アジアへの模範として語られたことは管見の限りなく、「信頼性」が低いとされたタタール人が徴兵されているのになぜ中央アジア人を徴兵できないのかが問題にされることもなかった<sup>(136)</sup>。

また、ロシア帝国の官吏は、全員が常に個別の対応を重視していたわけではない。むしろ、統一的な政策を取りたいという志向はしばしばあった。それを阻んだのは、有力な反対意見が出れば政策決定が止まる、また新任者が前任者の方針を撤回するのが当然視されるという慣行である。これは、政策が大臣や総督、知事など行政官の間の悠長な書簡のやり取りで決められ、個々の行政官の意見（特に否定的な意見）が尊重されるという、もう一つの意味での「個別主義」の現れであった。しかも、これだけ複雑な個別的政策決定の仕組みを持ちながら、実際に取られる施策が現地の事情に合っていないことがしばしばであった。総督が各州知事から意見を集め、州知事は各郡長から意見・情報を集め、郡長は各郷長から情報を集めることによって現地の事情を把握するはずであったが、郡以上のレベルと郷以下のレベル（現地民行政官）の間に信頼関係がなく、郷長らが「通り抜けることのできないカーテン」と見られている状態では、情勢把握は覚束なかった。

ロシアの政策への民族知識人の対応も注目に値する。カザフ知識人は多くの場合、帝政側の個別主義を否定するよりは利用しようとした。19世紀後半には、植民地官僚の言説

134 テレンス・レンジャー著、小林伸浩・亀井哲也訳「植民地下のアフリカにおける創り出された伝統」同書、325、377-398頁。

135 Virginia Martin, *Law and Custom in the Steppe: The Kazakhs of the Middle Horde and Russian Colonialism in the Nineteenth Century* (Richmond: Curzon, 2001), pp. 3-8, 166; 宇山智彦「カザフ民族史再考：歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』第2巻第1号、1999年、100頁。

136 ヴォルガ・ウラルのタタール人社会は、言説の上では常にロシア人から異化されながらも、制度面では宗務協議会、軍隊、ゼムストヴォ、学校などを通じて国家と深い相互作用の関係にあった点で、中央アジア・ムスリム社会とは大きく異なる。たとえば以下を参照。NAGANAWA Norihiro, "Molding the Muslim Community through the Tsarist Administration: *Mahalla* under the Jurisdiction of the Orenburg Mohammedan Spiritual Assembly after 1905," *Acta Slavica Iaponica* 23 (2006), pp. 101-123.

に合わせて、タタール人の否定的な影響を排除しカザフ文化の独自性を強調する主張が見られた<sup>(137)</sup>。カザフ人の宗教的権利と兵役免除を守ろうとする際には、ロシアへの併合にあたってツァーリから与えられたという特権を引き合いに出した。第一次世界大戦中には兵役導入の議論の中で、コサックが軍事身分として持つ特権と同等の権利を得たいという声がかザフ人から挙がった。しかしこれらの主張は、特に 20 世紀に入ってから、帝政側からの不信ないし無視に迎えられることが多かった。

ソヴェト政権は、民族区分を明確化し民族ごとの行政区画を設置するという新たな意味の「個別主義」を作り出したが<sup>(138)</sup>、民族自治の原則は全国でほぼ共通のものを採用し、書簡のやり取りよりは、各民族の代表者を取り込んださまざまな会議で政策決定を行う仕組みに切り換えた。普遍主義的な進歩史観に基づいてある民族の「後進性」を克服するために大学入学枠を与えたり、国家利益に反する対敵協力のような「罪状」を理由にある民族を強制移住させることはあっても、帝政期のように、特殊な民族性を理由にして民族ごとに異なる権利・義務を定めることは、少なくとも明示的にはしなくなった。その意味で、ロシア帝国とソ連は、仮にどちらも「多民族帝国」と呼べるとしても、違いは極めて大きいのである。

\*本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「中央ユーラシアの近代化における知識人の役割の比較研究」の成果の一部である。

137 Uyama, “A Strategic Alliance,” pp. 253-255.

138 Yuri Slezkine, “The USSR as a Communal Apartment, or How a Socialist State Promoted Ethnic Particularism,” *Slavic Review* 53:2 (1994), pp. 414-452.

## Russia as a Particularist Empire: Policies of Christianization and Military Conscription in Central Asia

UYAMA Tomohiko

This paper aims to challenge various traditional views of the Russian Empire: that it was a ruthless “Russifier” ; that it had a universalistic and harmonious principle for integration; that in its last stage the empire was transforming itself to a nation-state. I try to do so by examining history of two unsuccessful projects of the Russian Empire in Central Asia, that is, Christianization as propagation of a universalistic ideology, and military conscription as a tool of nation building.

Debates on Christianization of Central Asians began in the 1860s. The Kazakhs and Kyrgyz were considered to be half-Muslims, unlike Tatars and Uzbeks (“Sarts”), and therefore relatively easy targets for propagation of Orthodoxy. Opponents to Christianization, however, maintained that it could antagonize Muslims (including Kazakhs and Kyrgyz) and cause disorders. In Turkistan, whose Muslim sedentary population was called “fanatic,” Governor-General Kaufman practically prohibited missionary activities. He did not object to General Kolpakovskii’s support to missionary activities among the Kazakhs, Kyrgyz and Kalmyks in Semirech’e, but the results of proselytism there were meager.

Throughout the second half of the nineteenth century, only about one thousand Central Asian natives converted to Orthodoxy. The Tsar’s manifesto of religious toleration in April 1905, which conditionally sanctioned conversion from Orthodoxy to other faiths, dealt a final blow to missionaries. Most of the baptized Central Asians went back to Islam and almost no one was newly converted after this. Scenes of the revolt of 1916 in Semirech’e, where rebels killed monks and Russians in arms gathered in church squares, were highly symbolic in the sense that the Orthodox Church, after all, belonged to the Russians, not the native peoples of Central Asia.

The second part of the paper examines discussions on military conscription of Central Asians, who were exempted from it as *inorodtsy* (aliens). One of the arguments for conscription was the necessity of strong cavalry in preparation for possible wars with China and Afghanistan. Officers cited the high quality of Central Asian nomads as horse-riders, and emphasized that military service was a powerful tool of Russification and the best school to teach public order.

Again, a major argument against military conscription was the possibility of disturbances. Many officers feared that military service would give the population leaders for possible insurrections. Some also insisted that the conditions of military service radically contradicted the mode of life of nomads who were accustomed to unlimited freedom. Overall, they alleged that Central Asians’ “low *blagonadezhnost’* (trustworthiness) and *grazhdanstvennost’* (level of civic development)” was a fundamental obstacle to their conscription.

Officers evaluated the combat ability of various ethnic groups differently. They generally regarded the sedentary population of Turkistan as cowards and called the Kazakhs excellent horsemen but not necessarily courageous warriors, but were fascinated by the splendid quality of the Turkmen as warriors. This fascination gave birth to the exceptional case of the Turkmen irregular cavalry.

After 1905, Russian nationalists increasingly asserted that Russians bore an unjustly heavy burden in defending the empire, and called for drafting *inorodtsy*. During World War I, the Ministry of War drew up a bill to draft almost all the ethnic groups of the empire, but the Ministry of Interior nixed it. In 1916, the government suddenly decided to mobilize Central Asians not as soldiers but as laborers, which gave rise to a huge revolt.



On the whole, discussions of military service by Central Asians (which continued for more than half a century) took the character of a chicken-and-egg problem. Would military service enhance their *grazhdanstvennost'* and Russify them, or did military service require a sufficiently high level of *grazhdanstvennost'* and Russification? Eventually, officials who mistrusted *inorodtsy* always managed to block conscription proposals.

Reasons for the failure of the two projects were partly rooted in the Russian bureaucracy. Permission for missionary activities was often given after much delay or was not given at all. The Orthodox Church itself had a hierarchical and bureaucratic structure. By contrast, Muslim mullahs went into the steppe as peddlers and healers without bureaucratic procedures, and could easily adapt themselves to local society. Moreover, officials' grasp of local situations was shaky. They thought that native administration of volosts and villages formed an "impermeable curtain" and hindered them from knowing Muslim life.

The most important point of my analyses is the particularistic features of Russian policy. Many officials shared the view that it was desirable to Russify Central Asians, but there was hardly any resolute determination to carry out concrete measures for this purpose. They were interested in passive maintenance of stability rather than active integration and Russification. They did not just differentiate Central Asians from the Russians, but also differentiated nomads from sedentary people, the steppe oblasts from Turkistan. Officials were obsessed with the idea that they had to discuss the pros and cons of a policy measure in relation to every single region or ethnic group. This attitude of alienating (or otherizing) Central Asians and classifying them is what I call particularism.

Particularism partly derived from a character inherent to autocratic empires. In such empires, a subjugated country or people pledged allegiance separately to the monarch, and were given peculiar privileges and obligations. But in the second half of the nineteenth and early twentieth centuries, quasi-academic discourses on ethnic characters added new meanings to particularism. Courageousness, warlikeness, trustworthiness and *grazhdanstvennost'* were considered to be characters of ethnic groups rather than qualities of individuals. This tendency to attach excessively great importance to ethnic characters was a product of Orientalism and the mind of the colonial state.